國民文庫

第三編

歐米名家詩集

下卷

大和田建樹輯譯

東京 博文館藏版

歐米名家詩集　下卷

俗塵ヲ去ル遠キ凡ソ數萬里
天國ニ近キ事凡ソ一里有ル無シ
亦樂シキ住家ナラズヤ
年ハ永遠此幸有ル住家ニ生キシ哉

田中秋月

東京圖書館

大和田建樹輯譯

歐米名家詩集

卷下

東京博文館藏版

大和田建樹輯譯

歐米名家詩集

下卷

東京　博文館藏版

歐米名家詩集下卷目次

羅馬の夜（バイロン）……一丁
青蔦（デイッケンス）……七丁
アルセアに（ラブレース）……十二丁
鄉を懷ふ（ブラウニング）……十六丁
白鳥の巢（ブラウニング夫人）……十八丁
敗鬧（コレリッヂ）……三十丁
樂しき心（ラム）……卅二丁
野菊（モントゴメリー）……卅九丁
湖畔の暮色（ホイッチーア）……四十四丁
夢（バーンス）……五十四丁

海の寶(ヒーマンス夫人)……五十六丁
荒村(ゴールドスミス)……六十三丁
舟のもゝへ(スティヴンソン)……九十三丁
明けすてし窓(ロングフェロー)……九十五丁
風(スティヴンソン)……九十九丁
蜂(サウシー)……百二丁
清やかに冷やかに(キングスレー)……百六丁
蝶に(ウォーズウォース)……百九丁
羊飼の戀(マーロー)……百十二丁
少女の答(ラレー)……百十六丁
少女(フォーガソン)……百廿二丁
森の鳥(バンヤン)……百卅丁

砂上の文字(グールド)……百卅五丁
晩秋(パーシヴァル)……百卅八丁
懷舞(シルレル)……百四十三丁
海邊の王城(ウーランド)……百四十七丁
冬朝の散歩(クーパー)……百五十二丁
郭公(ウォーズウォース)……百五十九丁
アルペン山の獵夫(シルレル)……百六十九丁
追懷(ローシャース)……百七十五丁
希臘(バイロン)……百八十五丁
婚禮の歌(スペンサー)……百九十一丁

歐米名家詩集下卷目次終

蔵合

歐米名家詩集下卷

大和田建樹　輯譯

羅馬の夜

バイロン

傳は上卷にあり。

星は光を降らしつゝ
月も高嶺に見えそめて
夜は美しくふりにけり」
あはれ自然を友として
さまよふ身には人よりも

夜の顔こそ親しけれ」

たゞひろ〳〵とはてもなき
天つみそらの星の影
ながむるまゝに身はやく
世界の外におくられて
何くともなく妙音の
ひゞくは我か天上か」

思ひぞいづる我むかし
かゝる淋しき夕暮に
見し面影のかず〳〵を」

さしも榮えしいにしへの
羅馬の名殘ものすごき
跡を見せたる歌舞妓場の
殘壁高くそばだつは
波うつ木々の夜の色
星も綠にきらめきて」
タイバー川のかなたより
遠くこだまに答へしは
今も夜を守る犬の聲
風のまに〳〵
聞えしは
古殿の軒の梟と
番の兵士の歌のこゑ」

千古の跡を告げがほに
たてる檜の五つ六つ
空の境をくまどりて
畫がきわけたる墨筆は
たゞ目の前に面白し」
當時は帝を住ませたる
城もかくまで荒れはてゝ
今は聲ふき夜の鳥を
やどす外には主もふし
破れし矢倉おしわけて
宮の内まで爐邊まで

心のまゝに生ひ出げる
木々の梢をねぐらにて」
柱は何く今はまた
生ひ出でぬべき土地もふく
篤のみひとり榮えゆく」
血しほに染みし試合場は
ひとり昔の面影を
見せてそのまゝ殘れども
殘らぬ影を荒廢の
中に殘すはあはれこの
代々の帝の城の跡
今はむかしの宮のあと」

月よ〳〵汝こそは
淺茅が原と荒れはてし
都のさまを慰めて
影あたらしく下しつゝ
この限りなき年月に
やさしき光投げつるよ」
かはらぬ美をばそのまゝに
美ふらぬものをば美しく
見せて照すは汝が徳よ」
我崇敬をみちびきて
その壯大のいにしへに

通はしむるも汝が徳よ
灰の中より笏とりて
今も心を支配する
羅馬の帝のおもかげは
月にうつりて見ゆるふり」

青蔦

ディッケンス

チャールス、ディッケンス氏は千八百十二年の二月英國ハムプシャイアのランドポートに生る。九歳にして蘭動に移り住みしが、父は海軍吏を免せられしため貧困に迫り。氏が十二歳の頃

には其親戚の設立に係る靴墨製造所の職工と爲れり。後龍動のカムデン、タウンの一學校に入り。又グレース、インの法律事務所に職を奉じ。速記術を學びて議會の報告を作るに從事せり。晩年に及びて過激なる勉強のため健康を害し。「エドウヰン、ドラッド秘談」を半ば作りかけつゝ遂に黄泉の客と爲れり。時に千八百七十年。五十八歳なりき。著名の作は「ピクイック、ペーパーズ」「ニコラス、ニックルビー」「オリヴヰー、ツウヰスト」「クリスマス、カロル」「オールド、キューリアシチー、ショップ」等なり。氏は小説家として最も名高く。其作は殆んど各國語に譯せられたる程なりと云ふ。

其一

荒れしところを住家にて
心地よげにも這ひのぼる
あふ美らの青蔦よ
その心を滿たさんと
その食をあたへんと
壁も朽ちつゝ蔓を入れ
石も破れて葉を迎ふ
幾春秋の積みたてし
塵塚をさへ食として
人なき方にはふ蔦は
世にめづらしき草ぞかし

其二

身には翼を持たねども
這ひゆく道は速くして
心のみこそ古びたれ
友とたのむ樫の木を
まとひつゝ圍みつゝ
肥えたる墓地をわが床と
擁き抱へてうれしげに
蔓をば土に引きわたし
葉をば空にぞひるがへす
死をわが友と這ふ篤は
世にめづらしき草ぞかし

其三

すでに事去り時うつり
人は跡ふく散りゆけど
同じ色なる青篤よ
過去をもて食となし
荒廢を家となす
雲に聲ゆる高どのも
たゞいたづらに青篤を
肥やさんために築きしか
人の事業のはかなさよ
昔のあとに這ふ篤は

世にめづらしき草ぞかし

アルセアよ（獄中より）　ラブレース

リチャード、ラブレース氏は千六百十八年に生れ。英國オックスフォードに於て教育を受けたり。氏は熱心なる勤王家にて時の國王を助けんがために。我資産を傾けたる程なりしが。一たび平民黨に勝利を占められしより縲絏貧苦相纏ぎ。王政復古の後に至りても王室よりは更に眷顧を受くる事なく。嘗て希望せし慈悲と愉快と尊嚴との三つをば遂に得ずして身を終れり。時に千六百五十八年。齢わづかに四十歳なりき。

其一

自由の翼ひろげたる
愛はおん身を我やどの
圍爐裏のそばに伴ひて
情（なさけ）のきづなかけし時
空とぶ鳥のたのしみも
かくはあらじと思ひしを

其二

テームス川ともろともに

めぐる盃手にうけて
かざすいばらに勤王の
赤き心を見せし時
水ゆく魚もかくまでの
自由は得じと思ひしを

其三

天もひゞけとわが君の
御威たゝへし其時は
慈悲と愉快と尊嚴を
期して歌ひし其時は
波ふく風もかくまでの

自由は得じと思ひしを

其四

この石壁も獄ふらず
この鐵窓も檻ふらず
靜けき身にはいつまでも
たゞ隱家の心地して
天上にのみ有りと聞く
愛の羽ねこそ自由ふれ

郷を懐ふ

ブラウニング

ロバート、ブラウニング氏は千八百十二年龍動の近傍に生る。年長じて龍動大學に入り。壯年の頃伊太利に遊びて專ら伊太利文學と其歴史とを研究せり。氏の作は是より大に其影響を蒙りしと云ふ。千八百九十三年死す。年八十一。既に前卷にて紹介せしエリザベス、バレット女史を娶りしは。希代の雙美なりと世に羨み傳ふる處なり。

四月なかばの英吉利に
今身を置かばいかふらん
朝とく起きて見わたせば
榆のずはえの萌えいでゝ
若葉ひろげしあたりには

鳴くカナリヤも今ふれや
菓林木づたひて
五月にふれば飛び來つゝ
燕と共にかけわたす
枝をのばして垣根より
頰白鳥の巣も見られたり
畑うちのぞく梨の花
蹈みしだき鳴く鶯鳥は
聞きえぬ人のためやらん
同じ志らべを二たびと
其歌ごとにくりかへす
よしや夜露は淋しげに

野邊の草葉をおほふとも
日影眞晝にふりはてゝ
乳兒の玉とももてはやす
菜種の夢のさめんとき
心は空にうきたゝん

白鳥の巢

傳は中卷にあり。

ブラウニング夫人

其一

清き流れをひかへたる
牧場の草を延にて
エリーは獨り座し居たり
その美しき顏ばせを
木の葉は黑くくまどりて
あやしき影をゑがき行く

其二

エリーはやをら草原に
輕き帽子をぬぎすてゝ
下行く水にさしおろす
足を兩手にさゝへつゝ

前にうしろに身をゆれり
玉なす水はしたゝれり

其三

人ふき方にたゞひとり
もらす笑まひは幾ばくの
詞となりてひゞくらん
ふにして時を過さんと
思ふうちにも行末の
身の樂しみを撰びつゝ

其四

望みはさても何事ぞ
『馬中の馬にまたがりし
その戀人をもちてみん
蘆の葉影にかくしたる
白鳥の巣もかの人の
ためにはすべて見すべきに

其五

『馬は逸れし栗毛にて
人はけだかき威風にて
その吹きすさむ笛の音は
男子を殺す太刀よりも

少女ごゝろを一すぢに
刺さん調べを持つ人に

其六

『銀の蹄鐵ふみしめて
青空たかくいなゝくは
その戀人の乘る馬よ
風にひらめく鬣は
蹴たつる蹄もろともに
よその人目や奪ふらん

其七

『されどわらはを見る時は
暮れも何も打ちすてゝ
愛の詞やかはすらん
「君が目にこそ我心
住むべき宮はつくりたれ
見よや屈むる此膝を」

其八

『その時馬よりおりたちて
誠に膝を屈めたり
わらはゝ遂に答へたり
「いざ顔あげて馬にめせ

わらはが敬ふ人はまた
　世の敬愛も受くべきを」

其九

『顔青ざめて立ちあがる
　人に別れを告げんとて
　　我唇はふるひたり
少女心をはげましてつひに一言「いざさらば
　今日もて明日を照すべし」

其十

『小川を渡り山を越え
　廣き世界に鞭うちて
　　行く影見えずふりにけり
世の禍をはらはんと
人の憂をのぞかんと
　　惡徒の弓矢折らせんと

其十

『かの山路より川瀬より
　三たび來りて我まへに
　　屈む使の言の葉は
「見よ我殿がこゝろして

おん身の情に報いんと
贈らせ給ふ此品を」

其十二

『白き薔薇の答もて
最初にわらはゝ答ふべし
また二度目には手袋を
さて三度目の答には
心の角を折りすてゝ
「みづから殿のおはしふば」

其十三

『そのとき使者は馳せゆかん
わが戀人は鞭をあげ
來りてわらはに禮すべし
「我は數千の上に立つ
門地の家の公子ふり
されども愛は唯君に」

其十四

『わらはゝ公子の戀人と
ふりて數千の人中に
引き合はさるゝ嬉しさよ
かくて心の解けあはゞ

今ぞはじめて蘆陰の
白鳥の巣も見すべきに』

其十五

ほゝゑみながら少女子は
帽子をかぶり靴はきて
家路に今ぞ向ひゆく

されど日毎の習ひにて
卵子の數を見て來んと
まはりみちしつ今日も又

其十六

森の下道わけいりて
心おぼえの柳かげ
くゞりてとまる水の傍

あなや野飼の白鳥は
いつしか去りて跡もふし
蘆は鼠に齧まれたり

其十七

うちしをれつゝすご〳〵と
エリーは家路さしてゆく
栗毛の馬の大丈夫に
よしや遇ふ日はありとても

もはや蘆間の島の巣を
見ずる望みは絶えはてん

敗蘭

コレリッヂ

傳は上巻にあり。

若かりし日の昔より
友とし馴れし彼二人
さゝやく舌の剣もて
切り裂かれたる淺ましさ
あゝ永久は天にあり

刺のみ多き人の世に
おごりたかぶる少年の
傷つけられし感情は
狂氣の如くはたらきて
燒くとも消やる時あらじ
昨日は莫逆無二の友
今日は怨恨罵詈の敵
水魚中絶え蘭くだく
かくて二人の苦しみは
つひに心を去らざりき
恰も離れて立つ岩の

「サーレオライン」『ローランド』

裂かれし疵の如くにて
中をく波に打たれつゝ
痕(あと)をば長くとゞめたり
熱も氷もいかづちも
消すこと難き裂口(さけくち)は
波間に長く見られたり

樂しき心

チャーレス、ラム氏は千七百七十五年蘭動のイノナー・テムプルの一室に生れ。幼少の間はクライスト、ホスピタル(貧民院)

に於て教育せられしが。壯年時代をばイースト、インディア、ハウスの書記となりて費やしたり。氏は幼より赤貧の中に人と爲りて節儉の風に慣れたるが爲め。晩年に及び其作の世に弘く行はるゝに至りて。利得金は大方人に分ち與へて慈善の道に費やしたりと云ふ。千八百卅四年死す。年五十九。その傳記と著作とは文學の名家によりてしば〳〵出板せられたるを以て。世に貴重せられし一斑と知るべし。「エッセース、オフ、エリア」「ジョン、ウードヴィル」などゝ最も有名の作とす。

其一

尊き教へも望まねば

かしこき人に何請はん
數萬の財も欲せねば
富みたる家に何請はん
身につものは健康と
平和と輕きこゝろのみ
なほ智識より富貴より
まさる此身の寶には
憂をよそにあざわらふ
樂しき心あるものを

其二

世の人なみに我もまた

運を祈りし折もあり
身の不仕合かなしみて
天を恨みし折もあり
されど短き塵の世を
嘆きのうちに費やすは
愚かのわざと悟りつゝ
はやく望みを轉じたり
憂をよそにあざわらふ
樂しき心ひとつにて

其三

迷ふ眼は幾たびか

不運の我をいざなひて
嘆きの鄕につれゆきぬ
ふみだの淵に沈ませつ
それは昔と過ぎし世の
おのが心に哀しみを
猶も贈りて泣かするは
たゞ人知れぬ戀の道
憂をよそにあざわらふ
樂しき心をあらためて

其四

はかなき希望すてはてゝ

たゞ陰德を事とする
わが心こそ樂しけれ
わが世界こそまゝにふれ
自然の風にまかせつゝ
道理の檝にまかせつゝ
流れを下す我小舟
帆影ふくれぬひまもふし
憂をよそにあざわらふ
樂しき心をうちのせて

其五

されど浮世を渡りゆく

心は常に春ふかき
光を胸につゝみつゝ
人の機嫌にしたがひて
心地よげふる夢の内
いつもあきかひ遊ばせよ
ふほ我上にめぐりくる
運を待ちつゝ祝ひつゝ
憂をよそにあざわらふ
心のうちに過させよ

野菊

（クリスマスの日に一輪咲けるを見て）　モントゴメリー

ジェームス、モントゴメリー氏は千七百七十一年蘇格蘭に生る。「ジェッフ*ールド、イリス」の記者として知られたり。有名の作は「瑞西の周遊者」「西印度」「洪水前の世界」「綠蘭土」「ペリカン島」等を最とす。千八百五十四年死す。年八十三。

其一

銀の冠をかざしつゝ
金の眼をひらきつゝ
晝夜晴雨の差別なく
にほひて立てる此花よ

其二

たゞ一時の春風に　嫋びて高ぶる野の花は
咲くかと見れば早散りて　明日のは今日の物ならず

其三

されど自然を友として　咲ける小草の此花よ
一とせながら衰へぬ　色は日影のたぐひにて

其四

ほゝゑみそめし春べより　風吹きあるゝ秋までも
なほ物凄き冬を經て　年の終りのころまでも

其五

紫黄金(しがね)いろ〳〵の　花は嵐をしたがへて
百合は山路に香ばしく　菫は谷にうつくしく

其六

されど野菊は唯ひとり
森の深みに身を隱し
麓にあそび谷におり
孤の穴にぞ潛みゐく

其七

うちかへされし花園に
其身をよする折もあり
死期の暮れをさめたる
土に身をおく時もあり

其八

あさる羊も其うへに
つぶやく蜂も其うへに
雲雀の床を打ちこえて
戯るゝ蠅も其うへに

其九

フロラの神に仕ふる
花の少女よ其愛よ
いづくいかなる處にも
一とせふがら咲きにほふ

其十

野をも森をも巖をも　嫌はぬ花のやさしさよ
夏こそ薔薇の世界ふれ　野菊は枯れずとこしへに

湖畔の暮色

ホイッチーア

傳は上巻にあり。

其一

かふたは暗き山の端に
光の冠うちきせて
やう〳〵見えし月の影
毬かゞみか白玉か
聲なき海をみそらより
静かにながめおろしたり

其二

銀の縁もて畫がゝれし
その島々のうつくしさ
ならびかさふる岩の影
波にうかべる木々の影
するどく見せて遠近に

かゞやきわたる海の上

其三

青き煙につゝまれて
おぼろに立てる山々は
波路はるかにさま〴〵の
奇しき姿を畫がきつゝ
靜けき空に浮き沈む
光は夢かまぼろしか

其四

微妙壯嚴かぎりなき

影と虛空はふりにけり
たゞ寂寞のうちに立つ
湖水よ森よ人里よ
波と木の葉と虫の音の
外には響く物もなし

其五

晝夜の愛を受くるふる
この景色をも跡に見て
我は今より別れふん
あな名殘をしの海原や
白まぬ空にまづ落つる

月の夜影やいかふらん

其六

月はかくれし山の端の
松の木の間に弓とりて
立てるは誰ぞ曙の
光を間なく射いだして
黄金(こがね)の靴を波の上に
揺りあるく様いかふらん

其七

この笑顔よき汀には

長き心の健康と
花の盛の生活と
我にもまさる行末の
望みをこめて輝きぬ
又來ん夏の影見せて

其八

あゝ此水と此山と
ふかき名殘を我如く
外には惜む人あらじ
別れてのちも朝夕に
波と空とをあかきつゝ

立てる姿やいかならん

其九

墨にて島をかきすてゝ
銀にて波を塗りすてゝ
今宵の如き月はまた
あの峯よりやのぼるらん
紫いろの山の端に
入日は又もしづむらん

其十

笑顔を常の少女子も
愉快みちたる男子らも
今を盛の大丈夫も
山は綠に水白き
こゝにさまよふ樂しみの
その半だに滿たすまじ

其十一

自然の愛は深くして
その撰り抜きの賜物を
與へんとてぞ常に待つ
幾酸辛を嘗め來つゝ
その味ひを知る人に

その眞心を得し人に

其十二

わが幸を奪ひては
他の幸を降らしつゝ
廻りて止まぬ天の道
疾かれ遲かれ我神は
遂に違はぬ應報を
人間界にくだすふり

其十三

夜半の暗さと靜けさの

中にかゞやく此海よ
山の中央に包まれて
たのしく遊ぶ此海よ
天つ光を照りかへす
顏うつくしき此海よ

其十四

美の賜物を失はで
たもて北地の水海よ
汝が山々はいつまでも
神の力をしめすまに
汝は廣大無邊なる

神の慈愛のかゞみたれ

夢

バーンス

其一

日影に躍る花のもとに
おきしや此身見しや夢
添りおつる水晶の
流れに聲をかはしつゝ

うたふ野鳥も面白し
一天にはかにかき曇り
森縫ふ風のおとすごく
大波小波うちよせて
老木は四方に荒れ狂ふ

其二

これぞはかなき生涯の
欺かれたる朝なりし
畫にもなれば風いでゝ
花の如くにかゞやきし
身の幸ひを吹き去りぬ

かく移り氣の運命は
望みを與へ奪ふとも
心一つに身を寄せて
しづかに我を支へまし

海の寶

ヒーマンス夫人

傳は中巻にあり

其一

汝が箱に
なさむるものは何々ぞ
汝よ奇しき海原よ
青き眞珠も汝が箱に
虹色貝も汝が箱に
人に知られで徒に
光れる貝も汝が底に
たもて〳〵汝が富を
さびしき海よ
かゝる寶は何にせん

其二

なほ多く

靜けき波のあなたには
數の寶ををさめたり
きらめく玉も海が箱に
燃ゆる黃金も汝が箱に
千萬商の其手より
奪ひし黃金とりし玉
波のそこにいざ掃へ
慈悲ふき海よ
世にまた望む品ならず

其三

いにしへの

都の町をのこりなく
洗ひ去りしは汝が波よ
渦まく砂をひろげては
玉の臺も其底に
亂るゝ浮藻かぶせては
花の扃も其下に
亡ぶる國死する人
唯突け海よ
汝が戲むれに任すのみ

其四

なほ多く

汝が胸ふかくをさめしは
けゝ高き勇士の亡骸よ
今はふたゝび其耳に
波の響もきこえねば
雷と轟く戰爭の
聲も枕にさはるまじ
たもて金を玉ともに
荒るゝ墓場よ
猶も勇士をいざ返せ

其五

いざかへせ

失はれたる人々を
世に功ありし人々を
祈の聲は音もふき
夜中の空に登りつゝ
叫の聲はしづかなる
歌の調べにまじりつゝ
葬られし其墓に
なほよくたもて
汝がものふらぬ寶をば

其六

汝が胸は

少女の戀を沈めたり
　男の髪を打ちこえて
ふかるゝ汐は美人の
　花の冠を浸したり
いま一言を我寄せん
　聞きて忘るふ汝海よ
人間界のそのために
　ふほよくたもて
取り返すべき寶をば

荒村

ゴールドスミス

オリヴァー、ゴールドスミス氏は千七百二十八年愛蘭のリッソイに生る。家產豐ならざりし僧の子なり。十七歲にしてダブリンのトリニティー大學に入り官費生と爲り。二十一歲の時卒業して後醫學に從事せり。其文筆の業と取るに至りしは二十八歲の頃。專ら糊口のため二三の雜誌に寄稿せしを始とす。三十六歲の時「旅行者」の詩を作つて頓に其名をあげたり。三十八歲の時「ヴカー、オフ、ウェクフィールド」を出版し。四十四歲の時。こゝに抄譯せし「荒村」すなはち「デザーテッド、ヴィレージ」の名作出でたり。此外に「グード、チューアド、メン」「シー、スツープス、ツー、コンクアー」など最も著名なる戲曲として世に知られ。なほ歷史の作にては希臘史羅馬史英國史など

氏の傳記と裝ひたり。千七百七十四年四月死す。年四十六。一管の笛を携へて歐洲を漫遊せしは人のよく傳稱する處なり。

其一

樂しき村よ王晩よ
　わが最愛の此村よ
その健康と豊饒に
　慰められて鍬とりし
民の愉快ハ幾ばくぞ
　里の幸福いかほどぞ
春は早くも音づれて

まづ此村に影を見せ
夏ハ長くもとゞまりて
花に飽かせぬ年もなし
あハれ罪ふき村里よ
　わが安樂の王晩よ
たのしき内に送りたる
　わが少年の故郷よ
しづかなる身の幸福を
　さまよハせつる野はそこに
けしきに富みて面白く
　かゞやく野邊は猶そこに
木の間に見ゆる庵のさま

流れ絶えぜぬ水の聲
廻りて止まぬ水車
岡を占めたる田舍寺
綠の陰の床几には
話ずきふる老人と
さゝやきかはす戀人を
常に迎へし楛原
ながめに入りて幾たびか
たのしき影を畫がきけん
そのあたりにて幾たびか
うれしき旗日おくりけん
待つ日來れば村人は

仕事やすみておのがゞ〻
清き木陰に圓居しつ
うちむれ遊ぶ樂しさよ
かしこにハ輪にふりて
戲むるゝ少女童
こなたには勝負を
競ひあふ若者等
老いたる人ハ木のもとに
腰うちかけてふがめ居り
躍りくらべに腕くらべ
皆どりどりに繰返す
永き春日のたのしみも

疲れはつれば更に又
興ハ盡せぬ草の上
舞踏の猛者の一組は
勝ち誇らんとするやらん
狂ひたはるゝ人もあり
反響にかへし空に滿つ

新手ひきかへ入りかはる
手に手を取りて躍り出づる
相手を疲れ倒させて
墨ぬられしも知らずして
どよめき笑ふ高聲は
秋波ふゝめに少年の

方うち見やる少女を
睨みがほなる老嫗も
一つ莚にまどりたり
あゝ樂しみのかくばかり
滿ちたる村ハ又あらじ
わが最愛の王晩よ
汝はたのしき心もて
働くことを教へたり
村うちかこむ喜びの
力を汝は授けたり
されども今は如何にせん
汝がものなりし樂しみは

荒村

皆影消えて跡もふし

其三

笑顔滿たしゝ此村よ
汝がたのしみは今はふし
暴威の支配ひろげたる
村主の手に奪はれて
見らるゝものは荒廢を
田畑の中にのこすのみ
今は昔のほゝゑみを
野山にふかば殘すのみ
清き光を反射せし

小川の水は音ばかり
丈にあまりて生ひ茂る
草葉の底に殘すのみ
汝が谷間には五位鷺の
巣を守る聲も物凄く
荒れし道には鶺鴒の
こだま疲らす聲すなり
刈る人もふき夏草は
崩れし壁をぞ埋めたる
あゝ零落の汝が村よ
暴威におづる里人ハ
なれたる家も打ちすてゝ

散りゆくさまのあはれさよ

其三

攻め圍みくる災ひの
贄となりつゝ汝が村は
日に月々に荒れわたる
あれわたれども唯ひとり
富者はます〳〵富み榮え
貧者はいよゝ打ち沈む
あはれ浮沈の常ふきは
王侯貴人もかはらねど
それはたやすく時の間に

榮花に復すことも得ん
花と榮えし一國の
民をひとたび失はゞ
ひかりのごけき春の日に
又と逢ふべき世はあらじ

其四

我英吉利の民として
苦惱といふ事知らざりし
その古へは平等に
土地を有せし時ありき
身の勞働はわづかにて

世を安らけく渡りつゝ
生活上に必要の
ものより外ハ得ざれども
住む人々は無罪にて
身は健康に憂慮なく
富を知らざる人をもて
無上の富とふしゝふり

其五

されど間もふく時うつり
世は又これにて止まざりき
商賣といふ無情もの

此仙境を侵したり
民の資産は剝がれつゝ
ちり〳〵ふりし田舍屋の
立てるあたりは餘りある
富の街とふりはてぬ
昨日は無くて足りしもの
今日は有りても猶足らず
虛榮を好む痴漢の
受くべき苦痛も生れたり
嘗て心を滿したる
閑日月のたのしみと
勝を容るべき我室を

望むに過ぎぬ願事と
きのふは誰にも備はりて
誰が田畑をも富ましゝに
今日は此地を立ち去りて
ふほよき村やもとむらん
たのしき田舍の風俗も
今はむかしとふりにけり

其六

わが王晩の村里よ
親しかりつる年月よ
あれてさびしき山道は

人の嵐のあと見せて
過ぎゆく我をとゞめたり
住まで幾世のふるさとに
たま〳〵歸り來てみれば
感慨つくる時もなし
呼びかへさるゝ古への
過去は苦痛を誘ひ來て

其七

浮世の旅の苦しみを
神は我にも分ちたり
されどふほ

荒村

のこる齡を柴の戸に
おくりむかへて日に月に
細る命のともし火を
あだには消さじとばかりに
心の望みは持つぞかし
されどなほ
この村人をあつめつゝ
書物の上の經驗を
說きほこりもし夕べには
圍爐裏のそばに圓居して
わが思ふこと見聞くこと
語りなぐさみ遊ばんと

心の望みは持つぞかし
されどふほ
犬に追はれし野兎の
にげたる穴に歸るごと
長きくるしみ遁れての
後は再びかへり來て
このふつかしき故郷の
土に骸を埋まんと
心の望みは持つぞかし

其八

老の友ふる退隱よ

世の苦しみをよそに見て
のがれ住む身の退隱よ
かゝる靜けき村里に
勞働不斷の少年と
安樂無限の老年と
兩全しえてこゝに住む
人はいかふる幸福ぞ
强き力にさそはれて
世の競爭をものうしと
塵の浮世をよそに見る
人はいかなる幸福ぞ
彼がためには勞働に

泣くべき民も生れねば
命を危き礦山の
穴に職する者もふし
又は邪見の杖とりて
門に物乞ふ飢人を
おひはらふべき門番も
彼には絶えて要を見ず
その終焉に逢ふ時も
天使はあたりに滿ちて
墓路さしつゝすゝみゆく
苦痛知らせず迎ふらん
望みの光はすべて皆

今ハの床を照らしつゝ
かの天上のたのしみを
此世ながらに得さすべし

其九

かしこの岡に登り立ち
村の聲きく夕ぐれの
こゝろを何にたとへまし
胸にたゞよふ雲もなく
靜にあさみやくまゝに
萬籟一時に交はりて
見おろす里のそなたより

おこる響きも心地よし
乳しぼる少女の歌
和する男子の呼ばふ聲
子を戀ひて鳴く牝牛
汀に友を追ふ鵜鳥
學校ひけて歸る子等
風に吹やる門の犬
里の反響を滿たすふる
空しきこゝろの高笑ひ
かれこれ一度に湧き出でゝ
たのしみ深き黃昏に
歌ひ殘りし鶯の

聲の絶間を滿たしたり
されどもあはれ今は又
その人里の聲も無し
山路にこだま返しつる
樂しきひゞき何方ぞ
野路にひまふく見られたる
その足跡は何方ぞ
春はむかしの村里に
秋風ひとり更けわたる
草に埋れし汀には
腰を二重に屈めつゝ
立てる寡婦の影ばかり

さびしき中に見ゆるなり
あはれその老人は
春におくれ年たけて
命つぐべき麵包とては
川邊に摘める根芹のみ
寒さ凌がん柴とては
枯野に拾ふ茨のみ
かはる臥床を搜しては
夜もすがらに泣き明かす
かくあさましく荒れはてし
王晩村の歷史家と
ふして此世に唯ひとり

文を廢すもあはれふり

其十

その花園の名殘として
咲きみだれつゝ自がじゝ
笑まひをこぼす藪陰の
かたへに見やる楮原
あれぞ正しく此村の
教師住ませし家の跡
この人こそは一里の
敬愛うけてやたかふる
此世をこゝにおくりつゝ

他に職業を轉せんと
おもふ心ハ露も無く
富貴に媚びず權門に
求むる事も習はねば
時にしたがひ我立てし
說を變ずることもなし
その目的は遙かふる
空に向ひて聳えつゝ
世俗の塵に染みもせず
みづからのぼる路よりも
人をのぼすに熟したり
懶惰浮浪の輩は

その顔知らぬ者もふく
教師は彼等の行跡を
常に制して叱れども
又身の上の苦痛をば
助けんとこそ望みたれ
胸先までものび垂れし
驕の穢きをしるしにて
人に知られし乞食ハ
その容人の數なりき
奢りつくして浪々の
身となりはてし無賴者
それさへこゝに訪ひくれば

恵み受けざる日もあらず
隊伍解かれし廢兵は
起き臥す事をゆるされて
圍爐裏のそばに夜もすがら
主とかたり明かすなり
負ひたる傷の嘆息も
悲しき折の懷舊も
盡せぬ興に乘じては
撞木形なる脇杖を
振りまはしつゝ說き誇る
勝利ばふしも聞き事よ
かくさまゞのあはれなる

荒村

物語きくうれしさに
あやまられては其人の
不善の業も忘るまで
功を愛でもあへざるに
過を謗りもあへざるに
まづ湧きいづる同情の
心は身をぞ襲ひたる

其十一

かくまで深き慈善家の
缺けしところも道徳に
かたよりすぐる弊にあり

さはいへ義務と見る時は
救を叫ぶものごとに
いつも應じて世の人の
ためにぬきつゝ祈りつゝ
なほ同情を表しつゝ
かの親鳥が雛鳥を
みそらに誘ひ飛ばせんと
心はげましさまざまに
いたはり育てゆく如く
ありとあらゆる手を盡し
その怠りをよく責めて
光さやけき世の中に

荒村

つれださんとぞ案内(しるべ)する

其十二

悲哀と罪と苦痛との
かはる〳〵に襲ひくる
今はの床の枕邊を
一たび教師の訪ふ時は
病者の苦痛も失望も
あとなく失せて打ちふるふ
その口びるに讃美歌を
さゝやく力あたへたり

※　※　※　※

※　※　※　※

今は昔となりはてし
人の暑れのかひなさよ
村の木陰はのこれごも
榮えし家はいづかたぞ

※　※　※　※

舟のもくへ

傳詳ならず。

アール、エル、スティヴンソン

舟のもくへ

其一

藍色の水黄金の砂
岸の木陰を浮べつゝ
ゆく川はとこしなへに

其二

ふがるゝ木の葉よどめる泡
波にまかするわが小舟
共にそのゆくへいづこ

其三

川は絶えずぞ流れ下る
水車ある里を過ぎ
谷におり岡をこえて

其四

川は絶えずぞ流れ下る
千里の外の海までも
舟出せしか我子等は

明けすてし窓

ロングフェロー

傳は上巻にあり。

其一

緑さびしき菩提樹の
もとに立てるは誰が家ぞ
影と光とまじはりて
砂敷く道をおほひたり

其二

たゞ徒らに明け捨てし
子供の部屋の窓の内
今はそこより打ちのぞく
顔のふきこそ淋しけれ

其三

主なき宿の飼犬は
戸のかたはらに立ち居たり
もはや歸らぬ往昔の
遊びの友や慕ふらん

其四

子らは木陰を見捨てたり
子らは廣間を別れたり
たゝ悲しさと靜けさと

明けすてし窓

暗き影のみ此宿に

其五

心地よげふる調べにて
鳥は木づたひ歌ふふり
子供の聲を夢ならで
いつかは聞かん又こゝに

其六

わが傍に歩み來て
暖き手を觸れしめし
子は何故ぞ誰が子ぞや

あはれ淋しき木のもとに

風

ステヴンソン

其一

風を雲井に吹きとばし
鳥をみそらに吹きあげて
遊ぶ汝をぞ我は知る
野邊の草葉を撫でゝゆく
少女が裾の如くにて

すぐる汝をぞ我は聞く

おゝ風よ
あしたよりゆふべまで
おゝ風よ
高く歌をぞうたふふる

其二

汝がふす業は數おほし
されどかくれて其身をば
現はさぬこそ不思議ふれ
汝が壓す力われは知る
汝が呼ばふ聲われは聞く

おゝ風よ
あしたよりゆふべまで
おゝ風よ
高く歌をぞうたふふる

されどあひ見し事もふし

其三

つよくつめたく吹く風よ
汝が身の齡いかほどぞ
若きか叔は老いたるか
汝は野に住む動物か
森にうそぶくけだものか

やゝ力ある我友か
おゝ風よ　あしたよりゆふべまで
おゝ風よ　高く歌をぞうたふなる

蜂

傳は上巻にあり。

サウシー

其一

よき時にこそ來りたれ
忙がしき蜂よ忙がしき蜂よ
牧場の露に跡つくる
牛よりさきに起き出でゝ
わが散歩せし朝ぼらけ
はや汝(なれ)か影を見とめたり
汝蜂よ忙がしき蜂よ

其二

暮れはつれどもふほ止まず
忙がしき蜂よ忙がしき蜂よ
晝さく花は落ちはてゝ

夕べの薔薇の開くとき
静けき野邊のをちこちに
まだ汝が聲を聞き居たり
汝蜂よ忙がしき蜂よ

其三

儉約家とは汝がことよ
忙がしき蜂よ忙がしき蜂よ
朝から夜まで働きて
富みたる夏の花かげに
冬の食をぞ貯ふる
あはれ我には良きをしへ

汝蜂よ忙がしき蜂よ

其四

かく働くも何のため
忙がしき蜂よ忙がしき蜂よ
蔦の殘花も散りはてゝ
汝が業すでに終へし時
手をさしくだし掠めゆく
暴主の威こそ無殘ふれ
汝蜂よ忙がしき蜂よ

清らかに冷やかに

傳は上卷にあり。

キングスレー

其一

わらふ淺瀨をわが道と
夢みる池をわが道と
石を飛び越え梁を打ち
なほ清らかに冷やかに
鳥の群れ居る岩かげを
篤はふ寺の石垣を
鐘の聲さへ聞きすてゝ

汚るゝ世なく流れゆく
我かたはらにいざ遊べ
いざあびよ母も子も

其二

煙みちたる町をすぎ
いく水桶をくゞりつゝ
下水にそゝぎ川岸に
そひ行く時は世の中の
けがれをすべて集めつゝ
汚るゝまゝにいよゝなほ
其身富まして下にのみ

清らかに冷やかに

たゞきたふくぞ流れ行く
かくまで罪に汚れたるものと誰かは遊ぶべき
我かたはらをいざ避けよ
いざ逃げよ母も子も

其三

開けし水門おしわけて
今ぞ自由に走り行く
黄金(こがね)の砂をわが道と
さばしる瀬々をわが道と
流れを清め洗ひつゝ

八重の汐路に向ひつゝ
急ぐ我身は末つひに
失はれ行く海(わた)の原
罪より出でし魂の
汚れ殘さぬ如くにて
我かたはらにいざ遊べ
いざあびよ母と子と

胡蝶

ウォーヅウォース

傳は中卷にあり。

とまれ胡蝶よわがそばに
　飛ばでしばらく猶とまれ
わが幼年の歴史家よ
　共に語らん事おほし
ふほわがそばを逃げ去らで
　近く飛びこよ目の前に
過ぎし昔を呼びかへす
　あふうつくしの生物よ
わが家人ともろともに
　くらしゝ時のおもかげを
今も見するは汝がわざよ

われは遊びのたはむれに
　われは妹とうちつれて
　胡蝶を追ひし樂しさは
いつの折にか忘るべき
　獵人となりてこゝかしこ
躍り越えつゝ進みつゝ
　藪のかふたの林まで
たゞ一道に追ひ行きぬ
　息もつがずに馳せ行きぬ
されど胡蝶は我ためにも
　翼の塵を掃はれん
恐いだきて飛び去りぬ

羊飼の戀

マーロー

クリストフヮー、マーロー氏い千五百六十三年の二月廿六日英國のカンタベリーに生る。初め產地の學校に入り。後ケンブリッヂ大學に業を受けたり。氏は實にシェークスピーア翁以前の大脚本家として英國に名譽の花を咲かせたり。其文に溢れたる熱情と滿ちたる詩歌といえを讀みたる人の知る處なり。中にも「タンバルレーン大王」「ドクトル、フォースタス氏傳」「マルタの猶太人」「エドワード二世」等い傑作として世に行はる。千五百九十三年六月死せり。年僅に三十。

其一

來ませ吾妹子我かたに
いで戀人となりおはせ
さらば此世の樂しみを
共につくさん朝夕に

野にて森にて岡邊にて

其二

小鳥の歌も樂しげに
響く川邊の岩のうへ
手をとりかはし座をしめて
羊おひ行く牧童を

いざ諸共にながめまし

其三

君がためには春風に
かをる薔薇の花の床
見事に織れる花の帽
絲の葉にて繡をせし
衣も作りまぬらせん

其四

また小羊の若毛もて
いとうつくしく織り出だす

上衣も君にまぬらせん
寒き時には純金の
輪もてかざりし上靴も

其五

珊瑚のとめばり琥珀のぼたん
そのかざりせし麥わらと
桂の芽もて織れる帶
あはれこれらの樂しみが
君の心を動がさば

其六

樂しき五月の朝ごとに
　　わが牧童は君がため
うたひもすべし舞ひもせん
　　あはれこれらの樂しみが
　　君のこゝろを動がさば

少女の答

ラレー

サー、ウォルター、ラレー氏ハ千五百五十二年英國のデヴォンシャイヤ」に生る。氏の一生ハ實に學問の熱中と冒險とを以て充たされたり。十七にして軍隊に入り佛蘭西フランドルの

役に從ひしが。後西班牙の艦隊を破りたる勇士の一人と爲れり。その清楚たる容貌と溫雅なる風采とハ大にエリザベス女王の心を動かし、程なりと云ふ。亞米利加遠征を企つる事モ數次なりしが。五十一歳の時ジェームス一世に對する大陰謀を企てたる嫌疑によりて獄に繫がれ。十數年の後遂に死刑に處せられしハ惜しみても餘ある事なり。是れ實に千六百十八年六十六歳の時なりき。其作の有名なるものハ獄中に稿を成したる世界史これなり。今こゝに掲ぐる「少女の答」ハ前の「羊飼の戀」を承けて作れるものと知るべし。

其一

もしすべて

これが浮世の常ふらば
これが戀路の習ひふらば
又羊かふその人の
舌に僞ふきならば
わらはが心を動かして
君の戀人たらしめん

其二

さはいへど
川音すごく日はくれて
岩ひやゝかになり行かば
羊を小舍に追ひつれて

その牧童はかへるべし
しめりがちなる鶯の
音は物思や増さすらん

其三

さるほどに
花は枯れ行き野はあれて
いつしか冬とふり行かん
蜂蜜の舌胡桃のこゝろ
世にある例(ためし)と聞くものを
嬉しき春悲しき秋
人の習ひと聞くものを

其四

君がいふ

靴も衣も花床も
帽も上衣もすべて皆
忽ち破れしぼみなん
忽ち人に忘られん
人の心に秋たちて
風吹く頃とふりもせば

其五

君がいふ

珊瑚のとめばり琥珀のぼたん
あはれこれらの品物が　桂の芽もて織れる帶
君の戀人ならしめん　わらはの心動かして
たねとは誰か認むべき

其六

されどたゞ
春風ながく身をふきて
戀の餘のきえぜずは　淋しき冬の來らずは

少女の答

かゝる此身のよろこびは
わらはが心動かして
君がほとりにつれ行きて
君がほゞえみ
ながく戀人たらしめん

少女

フローガソン

（サー、サミュエル、フローガソン氏は千七百十年ベルフリストに生れ千七百八十六年に死す。年七十六。愛蘭國の文學者なり。）

其一

ふりくる雨のたゞ中に
山路をたどる少女子よ
ぬれて輝く頬の色は
見しこともふき美しさ
休まぬ歩みつゝしみて
あへぎ〳〵ぞ急ぎもく

其二

此雨風のあらき日に
家をはふれてたゞ一人
こゝに來るはいたづらに
遊びあるかんためふらじ

その信仰と要用に
身をはこびしは實ふらん

其三

使を今ぞしおほせて
家路にかへる少女子よ
雲間のかげのあふたには
吹きまく風のあなたには
高きのぞみの光こそ
汝が目の内にうつるなれ

其四

雨と風とにおそはれて
下る坂路のおそろしさ
されど遂には雲はれて
日かげのどかになりにけり
汝が足もとに村里の
ひろき景色を見するまで

其五

空につゞきて見えわたる
薄黒き森青き野邊
かしこの塔やこゝの寺
ふかめて立てる少女子は

ひろくふりたる世界をば
おどろくまでに思ふらん

其六

かしこに見ゆる里々は
嵐をふせぐ他の子等の
家あるかたときくものを
母あるかたときくものを
又あの畑は他の父の
耕す場處ときくものを

其七

田に行く農夫かへる馬
牝牛の小屋にたつ少女
子どもは圍爐裡かこみつゝ
夕ぐれごとに群れつどふ
汝がよそめにはいかばかり
樂しくゑをながむらん

其八

ふが行く道のかたへには
ぬれてにほへる花の色
今ぞ日かげに輝きて
もゆる茨よ姫百合よ

少女

汝が生活のおもかげを
うつして咲くか少女子よ

其九

たちまち胸に一片の
かゞやく思想は浮びたり
茨も百合もかくばかり
かゞやく事のなからまし
世界の上によき神の
光をくだすふかりせば

其十

ぬれたる顔にあらハれし
高き勇氣の心こそ
かゞやき出でしわが胸の
思想に跡をとゞめたれ
又も追ひくる雨のあし
雲は山路をかこみたり

其十一

われ今雲のあなたふる
尊きかげをうつすべき
遠き眼なもつふらば
必ず雨の山みちに

汝が手をとりて下りくる
天つ使を見るべきに

森の鳥

バンヤン

ジョン、バンヤン氏は千六百二十八年英國のエルストーに生る。三十二歳の時宗教上の罪に觸れて獄に下り。そこにて十三年間を費やしたり。其間に成れる「ゼ、ピルグリムス、プログレッス」の第一篇は五十歳の時に刊行せられ。大に世の喝采を博せり。千六百八十八年寵動に於て死す。年六十。

「わが小鳥よ　しげる茨の中にぬて
汝はいかでかうたふらん
われは愛もて汝を飼ひ　わが手に來り捕はれよ
汝はいま價なし　譽もて汝をかざるべし
さはいへ來れわが鳥よ　たれ一錢をなげうたん
けふは空よく晴れたれど　我にはあたひあるぞかし
あすは嵐にふりやせん

來れ小鳥よあたゝかく
　汝をふせがん我胸に
淋しき夜の來る時は
　寒さは汝を襲ふべし
晝は時々ねらひよる
　鷹の恐もやすからじ
汝はいかでか樂しげに
　かゝる中にて歌ふらん
あさりかねたる汝が食は
　虫と木屑の外ならず
來れ小鳥よ汝がために
　よき食物を設くべし

乳と砂糖と白麵包と
　好むがまゝにふるまはん
北風寒き冬の日は
　絹打かけてあたゝめん
わが父上の座敷こそ
　汝がすむ家よ宮殿よ
汝はあけくれその内に
　住みて歌ふも自由ふり
あはれ我小鳥よ
　來りてわれにかはれふば
ひとゝせながらすべて皆
　春の光に逢ふを得ん

その宮中の音樂を
　我は教へて歌はせん
今は夢にも知るまゞき
　妙ふる曲も習ひえん
聞く人ごとに譽められん
　その調べこそたのしけれ
犬と猫との恐をば
　心つくして防ぐべし
あはれ一つの危さも
　知らぬ樂土は我家よ
身は汝がためのよき保護者
　胸は汝が身のよきふしど』

されど小鳥は飛び去りぬ
　媚の詞も何かせん
子供を森にたゞひとり
　殘して鳥ははやあれに

砂上の文字

傳詳ならず。

エッチ、グールド

其一

貝をひろひてたゞひとり

さまよひあるく濱づたひ
身をかゞめては年月と
我名を砂に書きすてゝ
しばし行き過ぎ見かへれば
あれみよ波はいと早く
我が來し道にうちよせて
文字をあとふく洗ひたり

其二

あゝ唯かくの如くにて
地球の上に畫がきたる
己がしるしも時の間に

殘るあとふく消え失せん
「時」のいさごは世の中の
「忘れ」の波に洗はれて
我身に添ひし名も年も
我身はふれてあともふし

其三

されど其手に水をたもち
砂を數ふる我神の
記錄はながく傳はりて
無窮に消ゆる時あらじ
人の心と身にうけし

恥も譽もどこしへに

晩秋

パーシヴル

ジェームス、ゲーツ、パーシヴル氏い千七百九十五年の九月十五日。米國のコンヂクチカット州に生る。十六歳にしてエール大學に入り。卒業に先だつ一年前より醫學の研究を初めたり。後しばらくしてウエスト、ポイントに費の教授と爲り。又ボストンに至りて警察醫と爲り。博士ノア、ウェブスター氏の辭書を編纂するに當りてい依囑を受けて乏を補助せり。後官命を帶びて諸方の地理學上測量を爲したる事もありき。千

八百五十七年死す。年六十二。

其一

そだちし年は老いゆきて
牧場にひゞく鈴の音は
その牧童が身にまとふ
冬着の上よりひゞくふり
山毛欅の木の葉はうすぐらき
岩間の水に影見えて
颯と吹く風にひるがへり
小鳥の影も寒げなり

其二

のぼる朝日に輝きて
赤く飛び散る峯の霧
谷の流れのをちこちに
うら枯れわたる秋の花
萌ゆる草葉の色もなく
散りおくれたる紅葉ばハ
嵐に聲をたつるのみ
野はたゞ黑くなりにけり

其三

山下水はかれ〳〵に

しのびて谷を下りゆく
凄き響は冬川も
知らぬばかりの聲なてゝ
瀧の流れは淋しげに
松の木陰におちきたる
いづくの瀧もまだ知らぬ
凄き反響をひゞかして

其四

四方のけしきを薄く濃く
色どりわけて霧は今
葉もふき山にかゝるなり

たちまち起る秋風に
吹きちらされて遠近に
たゞよふ影も物淋し
暮れ行く空を迎へては
夜のくらさを猶染めつ

其五

血ににじみたる月の色
しめるみ空を今ぞ行く
鍬ともゆる狐火の
あらはれ出でし心地して
たちまち影は隱れたり

嵐の雲のその中に
悲しき空よ夜のさまよ
暗き外には物もなし

懷鄕

シルレル

ヨハン、クリストフ、フリードリッヒ、シルレル氏は千七百五十九年、獨乙國のヴュルテムベルヒに生る。長じて其地の兵學校に入り。又法律學に從事せり。然れども生來法律學を好まざりしかば遂に棄てゝ軍醫と爲れり。其後浮沈定まらざりし種々の境遇を經て。二十二歲の時エナ大學の史學教授に任

せられしが間もなく病によりて之を辭し。文學雜誌の發行に從事せり。千八百五年遂にワイマールに於て死す。年四十五。其著名中にも著名なる大作は「ウヰルヘルム、テル」なり。是は死に先だつ一年病蓐にありながら筆を取りたるものなりと云ふ。

其一

霧さむき此谷を
　出で行かんよしもがな
天に謝するもあまりあり
　あれに樂しき岡山の
いげは綠に浮びたり

いざ行かんいざ登らん
　二つの羽ねを身に持たば

其二

しづかなる音樂の
　聲きかん樂しさよ
風かうばしく薫り來て
　木の實はあかく熟したり
青葉がくれに咲く花は
　雪さむき冬の空に
得られんものゝ樣ふらず

其三

空氣よく日影よき　この岡のけしきこそ
つきぬ心の樂しみを　今もわが身におくるふれ
たゞいかにせん川水の　吠え怒るひゞきひとり
恐れの聲をわが耳に

其四

ふくれたる帆をのせて
うねり行く一葉舟

見よや舟子のかげもなし
危險侵すは汝がつゝめ
その驚きを揖として
いざ渡せいざ漕ぎ行け
圓滿美麗の樂園に

海邊の王城

ウーランド

ヨハン、ルードウヰヒ、ウーランド氏は千七百八十七年獨乙國のチュービンゲンに生れ千八百六十二年其地に死せし有名の詩人なり。天もしこれに壽を借さば無數の大作を出ださし

むべかりしに借むべし。沒せし時年わづかに二十五。

其一

『見たりや汝は海岸に
高く聳ゆる王城を
五色の雲の中に立つ
玲瓏美麗の王城を

其二

『鏡の如き水面に
倒に落つるその影を
夕燒雲の空たむく
よづるに似たるその影を』

其三

『我こそ見つれ海岸に
高く聳ゆる王城を
欄干に倚る月かげを
廊めぐる夜がすみを』

其四

『怒れる波は汝がために
悲壯の曲を奏せしか
嵐にまゞる琴の音と

歌の志らべを聞きたるか』

其五

『波も嵐も聲たえて
　深き夢路に沈みたり
涙にひゝく悲しみの
　歌のみ耳にひゞきたり』

其六

『見たりや汝は國王と
　王妃のおはすその樣を
ひらめく御衣の紅を

かゞやく御冠の金色を

其七

『玉の御手には美しき
　少女を導きおはしけん
高き日かげの御ひかりに
　黄金の髪をてらさせて』

其八

『我こそ見つれ國王と
　王妃のおはすその樣を
墨の喪服につゝまれて

されど皇女は影もふし』

冬朝の散歩

傳は上巻にあり。

クーパー

今こそ朝よ日はあれに
玉とみがゝれ登り來ぬ
風におはれし村雲は
日の空高くなるまゝに
枯木の森の木の間より

火事の如くに見ゆるふり
雪の谷間にすべり行く
うす紅の光線は
森を林を染めふして
脊高き影を地にひきぬ
今わが足は痩せはてゝ
姿をかしくうつしつゝ
われを嘲る如くにて
われ行けば又影も行く
野邊の綠はあともなく
光の底にうづもれて
かれたる草の葉末より

ひとむら目だつ薄原
氷の髪をいたゞきて
うなづく樣の美しさ
眠りかねたる小羊は
垣ねの隅に集りて
いつもの食を待つふらん
化石の如くおともせず
その飼主は庖刀を
飼葉の中に突きこみて
定めの量を切りとれば
のこれる束の半分は
壁の如くに突き立ちて

風に倒れんさまもなし」
里訪ふ人をあとに見て
手なれし斧をふるはんと
樵は山にのぼり行く
さびしき森のその奥に
痩せたる耳をそばだてゝ
短く卷きし尾をふりて
打ふがめたる里犬は
今そのあとに這ひ行きぬ
象牙に似たる齒を出して
碎けし雪をこゝかしこ
齒みちらし又鼻をもて

かなたこふたと堀りまはし
まみれし雪をふるひては
いと嬉しげに吼ゆるふり

※　※　※　※

日影待ちえし嬉しさは
同じ心にうちつれて
なれし主(あるじ)の呼聲を
しるべに今ぞつどひくる
池の家鴨(あひる)よをしどりよ
羽風を立てゝむらがりて
半は空をかけりつゝ
半はつちを歩みつゝ

見よや雀はよきをりと
屋根よりこゝに飛び來り
まき散らされし米を見て
啄みかへり行くもあり
拾ひつくして水鳥は
風おだやかに日影よき
汀もとむる外に又
望なき身とふりにけり
群れ行く鶏の先にたつ
雄鳥はふほもほこりつゝ
わが美しきありさまの
かはりしを見て怒るらん

すぎつる夏の朝ぼらけ
　樂しき歌をうたひつゝ
岡と谷とをみたしつる
　千々の小鳥は何方ぞ
地球はもはや鳥のため
　わかち與へんものもふし
氷の底に鎖されて
　春まつ虫はすこやかに
土の深みに隱されて
　春まつたねは靜やかに
木の實を駒鳥にあたへつる
　梢はかれて今は又

春に生れし歌人を
　養ふすべも絶えはてゝ
つゞく寒さは住みなれし
　鳥の數をも減らすまで
穴の内にはおのづから
　安き住家をもとめつゝ
死ふぬ先にといそぎ行く
　虫こそあまた見られたれ

郭公

ウォーヅウォース

傳は中卷にあり。

其一

やよ幸福ふる新客よ
　あなうれし　われは汝をぞ今きゝし
鳥と呼ばんかさては又
　さまよふ聲と呼ぶべきか

其二

草をむしろに折り敷きて
われは又
　ふたゝび聞きぬ汝が聲を
岡より岡にひゞきつゝ
　あるひは遠く又近く

其三

日影のどかに輝きて
　うつくしく　花咲く谷に汝は呼ぶ
その聲ごとに傳へくる
　想像がたりいくばくぞ

其四

郭公

三たび迎へてわが客を
いつくしむ
春の愛子のほとゝぎす
汝は吾には鳥ならず
あやしの影よたゞ聲よ

其五

小學校にかよひたる
その頃も
聞きし覺えのある聲よ
森と空とを百千たび
ながめさせしは此聲よ

其六

聲をしるべにいく度か
たづねつゝ
わけ入らしめし森の奥
見えぬうちにも汝はなほ
愛と希望をしるべして

其七

綠なのしき野に出でゝ
今もなほ
聞くを得べきは汝が聲よ

黄金(こがね)の光かゞやかす
時にふたゝび逢ふまでも

其八

おゝ幸福ふる新客よ
まてしばし
此わが立てる人界は
虚無縹緲の間にて
汝(な)が住家にはかふひたり

反響

モーア

傳は上巻にあり。

其一

夢ふきさます笛竹の
波にこたへて湖を
はるかに渡る夜半の聲
あふ心地よの音樂や

其二

されども愛はこれよりも

なほ誠ふる響きあり
月夜の空に澄み渡る
笛の音よりも琴よりも

其三

火よりも熱き少年の
心にひゞく其歎き
たゞひとりなる戀人に
吸はれて反響かへす時

五月の朝

ミルトン

ジョン、ミルトン氏は千六百八年龍動に生る。長じてケムブリッヂに教育を受けし頃。最も羅甸詩學に精通せしとの名を得たり。二十九歳の時伊太利に遊びて三年間を費やし。家に歸りて三十五歳の時ボーウェル孃を娶りしが。間もなく離緣せり。中年にして眼病に罹り一時は盲目と爲りし事もありき。千六百七十四年死す。年六十六。其傑作として世に知らるゝは「失樂園」「ラレグロー」「リシダス」等なり。

東の空にあらはるゝ
日の魁の星のかげ

今ぞ五月の手をとりて
　その綠なる袂より
黃ふる藍なるさまざまに
　まきちらし行く草の花
呼び起さるゝ歡樂よ
　樂しき望みよ少年よ
花の五月のめでたさと
　情ぶかさを今ぞ知る
身を飾らるゝ森林
　めぐみにほこる谷小山
いでわれは
　あしたの歌をうたひつれて

汝を迎へ汝をこゝに
　長くとゞめんいつまでも

アルペン山の獵夫

シルレル

傳前にあり。

其一

『心やさしき小羊を
　汝は飼はんと思はずや

あれ見よをちの川岸に
春の草はむ小羊を』
『母よ〳〵我は行きて
山の上まであさりこん』

其二

『角笛(つのぶえ)たのしく吹きたてゝ
羊呼ばんと思はずや
森の歌かと聞くまでに
嬉しき鐘は今ひゞく』
『母よ〳〵我ハ行きて
すごき山路をたどりみん』

其三

『かはゆき花を汝(なぢ)が園に
うつし植ゑんと思はずや
すごき山路に入れば
汝(なれ)を迎ふる人もふし』
『母よ〳〵我は行かん
花は自然に咲くぞよき』

其四

子どもは獵にいで行きぬ
獵は子どもをつれ行きぬ

息をもつがず夢中にて
木陰こぐらき山みちに
あふや追はれし羚羊は
疾風の如く突き來る

其五

胸もあらはに身を投げて
をどり上りし岩の上
裂目目がけてあやふげに
おつるが如く飛び込みぬ
今ぞ子どもはうしろより
弓ひきしぼり追ひて行く

其六

巖峨々たる絶壁の
高きところに登りたり
廂の上に立つ如く
足ふみかけん方もなし
前は千尋の谷の底
うしろはつゞく敵の影

其七

哀しき眼ふりむけて
嘆き請へども早おそし

矢先は我にむかひたり
たちまち岩の裂目より
霜をいたゞく老翁は
あらはれ出でゝ前に立つ

其八

仙骨たかき老翁は
羚羊を兩手に禦ぎつゝ
『地上はひろしいづくにも
人をこばまん方あらじ
など我羚羊をくるしめて
死苦をおくりに來りしぞ』

追懷

傳は中卷にあり。

ロージャース

暮れ行く野邊に露見えて
靜かにしめる空の色
晝さわがしく人里を
もれし響きもをさまりて
樫の老木の木陰には
あつめられたる村人等

讃美歌うたふ聲きゝて
　妙なる音樂たのしみて
忙がしき日を終りたり
　靜けき夜半を迎へたり」
今はいづこぞ暮ごとに
　音樂をもてわが心
樂しませたるその人は
　つもる話といましめを
われらがために與へつゝ
　うやまはれたる老人は
樂しき夢も影うせぬ
　嬉しき樂も聲たえぬ

されどあたりを去りやらで
　さまよふおのが心には
いかに消えせぬ愛着の
　ふかき思をとゞむらん
見よや木の間に朽ちのこる
　憂はしげふる軒影を
住まで年ふる高どのは
　たゞいたづらに風に嫋び
篤に縫はれし窓ならて
　光を入れんロもふし
半たふれし門入りて
　綠ぬひ行く草のみち

思へばこゝぞいにしへの
遊戯をふしゝ庭のあと
まだ初旅の人生が
おもふまゝふる想像を
心のうちにゐがきつゝ
約束せしは其頃よ
苔みどりなる破風のうち
幾代住みたるつばくらの
巣も神さびて見られたり
この清淨の賓客よ
きけ開戸の人ふきに
あふるひゞきの物凄さ

いざ應接の間をあけて
過去のなごりのあとを見よ
議論にふける判官を
すゐたる倚子はこゝふりき
今は露のみ座をしめて
蜘蛛の巣くらくかゝるなり
嬉しき鐘の響もて
うたれし屋根もこゝふりき
客に馳走の庖丁を
受けし庖もそこふりき
子供心に湧きいづる
輕き笑とよろこびの

目の光もてみなされし
人を入れしもこゝぞかし
踏み鳴らし行く上靴に
揺られし跡もこゝぞかし
目かくしせしも輪にふりて
遊びしあとこもよそならず
ゆめかうつゝか想像は
みるゝ羽ねをひろげ行く

※　※　※

黒みわたりし倚子を見て
又忍ばるゝ過去の友

※　※　※

あばれはてたる花園の
草の中みちわけ行けば
わが身一つをおそひくる
昔のゆめは木の間より
入日のあとの西の空
紫色に染みしころ
おのが巣さして歸り行く
蟻をふがめしをりもあり
甘露を腹にみたしつゝ
春のめぐみを嬉しげに
羽ねうちひろげ還り行く
野蜂むかへしをりもあり

行末誓ふ友情の
文字刻みたる木の皮は
「月日」の雨にうたれつゝ
今は流れて跡もなし
嬉しきうちにも恐ろしく
影をまじへて茂りあふ
二木の榆の木のもとを
めぐり遊びしをりもあり
根をあらはしてもつれあふ
木かげに菓子の粉をまきて
家路にむかふ駒鳥を
呼びとゞめたるをりもあり

※　※　※　※　※

わが學校の玄關は
苔にふかくも埋もれて
通ひなれたる生徒等の
ゆくへ語るが如くなり
明方つぐる鐘のねも
絶えて久しき森の道
たゆむ歩みをいそがせて
心はげます事もふし
晝のやすみを待ちわびて
いま何分と數へたる
時計も見えず音もせず

こゝに生れて又こゝに
死期を迎へし少年の
友情胸にあつまりて
おつる涙をいかにせん
何ごゝろなき木の葉まで
樂しかりつる古への
夢のこだまをかへすなり
見えかくれする幻の
影を黄金にゐがくふり

※　※　※　※　※　※　※　※

希臘

傳は上巻にあり。

バイロン

其一

コロンナのたかねより
ながめやられて獨身の
無聊をつれに慰むる
あのうつくしの島々を
笑顔やさしき春秋に
たえずとはるゝ希臘よ

此樂園を洗ひては
歡び笑ふ夕波の
上に影おく峰々を
又照りかへす海のさま
水の鏡をくだきつゝ
花の梢をはらひつゝ
吹くとしもふき春風の
そこにおとづれ行くごとに
えならぬ香をや傳ふらん
よろこび迎へぬ人もふし
花嫁として驚の
心まよはす薔薇少女

谷に岩間に咲きみちて
その戀人のものがたり
赤らむ顔に聞きぬたり
その花婿も戀人の
ために調ぶる音樂を
雲の上まで送るふり
園の女王と咲きほこる
薔薇は西ふく嵐にも
雪にもたへておのづから
與へられたる花の香を
天つそらにや返すらん
雲の上にや貸すふらん

色も香もとりどりに　咲きみだれたる夏の花
愛の手にわかたれし　思ひも清き木々の影
天はたゞすみかにと　つくりし如き岩の洞
あはれそこには海賊を　珍客として住ませたり
晝はをぐらき岩穴の　かげに小舟を潛ませて
舟子の歌のひゞくまで　夕の星のいづるまで

こゝに過ぎ行く舟かげを　今やおそしと待ち居つゝ
それぞと見れば櫓のおとを　殺して遠くねらひよせ
得物を舟に打ちのせて　歌聲たかく漕ぎかへる
あないぶかし　よき神々のすまひにと
つくりし如き此土地は
優美の花を昔より　蒔き生ほしたる樂園は
おしよせ奪ふ敵の手に

希臘

かきみだされてあともなし
こゝにほころび咲きにほふ
花のためにはしばらくも
人手かりたる事もふき
此天然の花園を
荒猪の如くふみにじる
人のしわざを如何にせん
この苦しみを逃れんと
身を春風にまかせ行く
花のそばにはあはれみを
猶も請はんと夕影に
媚びてほゝゑむ花もあり

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

婚禮の歌

スペンサー

エドマンド、スペンサー氏は千五百五十三年龍動に生る。氏の詩は想像の豊富と音調の優美とを以てあらはれ。中にも「神仙譚」を終世の傑作とす。氏の時代には世人なほ文學に冷淡にして。女皇の下賜と約したる年金もしば〳〵與へられざる事あり。爲めに困究の生涯を送りしと云ふ。千五百九十八年死し。ウエストミンスターの寺院に葬らるゝの榮を得たり。

其一

日影にもゆる陽炎(かげろふ)の
のどけき空におとづれて
暑さをよそに拂ひつゝ
風こゝちよく薫るなり
その時我はしろがねの
龍の如くに流れ行く
テームス川に苦痛ある
胸あらはんと立ち出でぬ
水かゞみして咲く花は
さびたる岸を飾りたり

牧場は花をさゝげつゝ
思ひかはしゝ戀人の
かざしとならん婚禮の
日を數へつゝ待ち居たり
あな心地よのテームスよ
清き流れのテームスよ
しづかに行け今しばし
わが歌うたひ終るまで

其二

川のほとりの牧場には
立てる少女の二人づれ

結びもあへずかいやりし
　　絲の髮のにほやかさ
たくみに編める一對の
　　柳の籠を手にとりて
そを滿たさんと美しき
　　指のさきにて摘み入るゝ
花は種類をつくしたり
　　種類は花をあつめたり
青きすみれ清き百合
　　まことあらはす櫻草
タべにとづる野菊をも
　　紅もゆる薔薇をも

かの美しき花婿の
　　しるしとなりてかざゝれて
にほはんために婚禮の
　　日をかぞへつゝ待ち居たり
あふ心地よのテームスよ
　　清き流れのテームスよ
しづかに行け今しばし
　　わが歌うたひ終るまで

其三

少女と共に一對の
　　影をふらべて此川を

今くだりゆく二羽の鳥
あなうつくしの白鳥よ
ピンダス山の頂を
おほへる雪も此鳥の
清き羽いろに比べては
白き光やうしふはん
ジーヴの神の御姿も
レダの女神の御光も
此白鳥にふらべては
美しからじ白からじ
清き流れの此川も
絹とかゞやく其羽ねの

汚れね影をうつしては
ふほ恥かしき思ひあり
あな美しの此羽ねを
うつくしからぬ流もて
汚すことこそ婚禮の
其日のために悲しけれ
あふ心地よのテームスよ
清き流れのテームスよ
しづかに行け今しばし
わが歌うたひ終るまで

其四

少女は籠に滿たしつる
花を手毎にたづさへて
かの白鳥のうかびくる
川のほとりに立ち出でぬ
あふうつくしの白鳥よ
あな愛らしの白鳥よ
かく見事なる翼をば
少女はいまだ見ざりけん
星の車を挽くと聞く
天つ翼か其いろは
下界の塵にけがされぬ
天つ使か其かげは

されどあれふるテームスの
草みどりなる岸陰に
夏のひかりの音づれて
育てしたねと聞くものを
あふ心地よのテームスよ
清き流れのテームスよ
しづかに行け今しばし
わが歌うたひ終るまで

其五

少女はすぐれし花房を
籠の中より拔きとりて

白き翼に投げかけつ
たゞよふ波に振りまきつ
ふかれは今ぞ花嫁の
床を載せゆく心地して
かをりみちたる春風の
中をゆくこそ樂しけれ
少女はほほも美しき
花輪を二つ編みふして
雪より白き白鳥の
頸の上にうちおきぬ
少女の中の一人は
婚禮の日にうたはんと

つくりかまへし歌の曲
しらべも妙にうたひけり
あな心地よのテーマスよ
清き流れのテームスよ
しづかに行け今しばし
わが歌うたひ終るまで

其八

『汝』しづかなる白鳥よ
下界よそほふ其羽ねよ
天の光の其羽ねよ
幸おほき月と日は

汝が戀人の家路にと　汝を導きおくりやく
心ハ戀の滿足と　喜びをもて滿たされん
愛の女王のヴーナスも　たゞ汝が上にほゝゑみて
戀の暗路を照らすらん　光はながくとこしへに
無窮無限の平和こそ　汝にはつねに伴なはめ
庇はいつも滿足の　こゝろを見せて汝を待ち

臥床ハ清き歡樂の　ひかり滿たして盡もせず
かくて榮ある花の木に　實を結ぶべき時も來ん
敵を亡ぼし樂しみを　增すべき子孫も世に出でん
あゝ遠からぬ婚禮の　日は來るべし汝が上に
あふ心地よのテームスよ　清き流れのテームスよ
しづかに行け今しばし　わが歌うたひ終るまで』

其九

少女の歌は終りたり
　和する調べは響きたり
外の少女は集まりて
　はや遠からぬ婚禮の
日を告げ知らす其歌を
　又くりかへし歌ひたり
しづけき空に打ちかへす
　聲は天女か山びこか
反響(こだま)も盡きぬうれしさを
　同じ心にうたふらん

波間の鳥の一つがひ
　影をかはして浮びゆく
見よ其みちのあとさきに
　群がりきたる水鳥は
小さき星の明星に
　ひかり消さるゝ如くにて
はや近づきし婚禮の
　式の稽古やまなぶらん
あな心地よのテームスよ
　清き流れのテームスよ
しづかに行け今しばし
　わが歌うたひ終るまで

※　※

※　※

※　※

※　※

※　※

其十

雲に聳ある高殿に　あらはれいでし貴公子は
きらめく髪をふびかせて　日影の波に洗はせて
夕べの星かとばかりに　川岸ちかくくだり來ぬ
從ふ侍者の數のうち

外見に適ひし才能と
あたりを拂ふ風采に　身をよそほひし武士二人
ながめ晴れたるテームスの　汀にあゆみよりつるが
少女は今やその人の　花嫁とこそなりにけれ
契り違へぬ婚禮の　日は遠からず來りふん
あふ心地よのテームスよ　清き流れのテームスよ
しづかに行け今しばし

歐米名家詩集下卷終

わが歌うたひ終るまで

落合

明治廿六年十二月廿五日內務省許可
明治廿七年三月廿二日印刷發行

國民文庫定價
壹册二百頁ノ金拾貳錢
六册前金六十七錢
十二册前金壹圓廿五錢
郵稅一册四錢
每月一回發兌一ヶ年間ニ出版完成

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

編輯兼發行者 大橋新太郎 日本橋區本町三丁目八番地
印刷者 近藤圭造 麴町區飯田五丁目廿六番地
印刷所 近藤活版所 麴町區飯田五丁目廿六番地

版權所有

岡本黃石翁題詩
朝鮮朴泳孝題辭 松井柏軒君撰

和漢名家詩集

全一册洋裝 正價二拾錢 郵稅三錢

傑士の高義、美人の熱淚、直に發泄して詩歌と爲る詩歌は文學上尤も趣味あるもの也就中学句の雄麗なる思想の宏大なる、音調の勇壯なるものに至て実に漢詩を推さゞるを得ず此書は和漢歷代の詩集を渉獵して華を拔き英を選び部門を分ちて之を編次せるものにして本朝古今の名詩は固より、唐詩の雄美、宋詩の清逸元詩の宕兀明詩の功麗、清詩の婉綴、其醇の詩なるものは皆一編の中に粲爛たり、目下之を誦せば志士は舊ひ美人は泣かん創書孝酒、坐右此の一本あらば又紛々たる幾多の詩集と要せず

853
853

大和田建樹先生著

國民文庫

國民文庫は、明治廿七年に於ける、文學の新天地を開闢するものなり、國民文庫は明治廿七年に於ける、新知己を紹介するものなり、國民文庫は明治廿七年に於ける、新體歴史の開拓に奮つて鍬を執るものなり、未だ廿七年の新社會は、又將に既往廿六年の舊社會と共に一新すべき、文學世界の風潮を卜知すべきは此書あるのみ

全部拾二卷　毎編讀切　洋裝美本

正價　一册（二百頁）拾二錢○六册前金六拾七錢全十二册前金一圓廿五錢○郵税一册四錢

本書總目次

第一編　歐米名家詩集　上卷
第二編　歐米名家詩集　中卷
第三編　歐米名家詩集　下卷
第四編　文學遊戯　上卷
第五編　文學遊戯　下卷
第六編　新体日本歴史　上卷
第七編　新体日本歴史　下卷
第八編　新体萬國歴史　上卷
第九編　新体萬國歴史　下卷
第十編　明治文學史　全
第十一編　新体文林　上卷
第十二編　新体文林　下卷

通俗教育全書

全部百卷　毎編讀切　洋裝美本

正價　一册（二百頁）金拾貳錢○十二册前金一圓二十五錢○二十四册前金二圓五十錢○五十册前金五圓○全百册前金十圓○郵税一册四錢

社會革新の原動は平民教育なり平民教育の大主眼は則ち通俗教育なり今幼稚園より專門學校に至る迄順を追ひ課を定め戯技學理歴史修身英語算術等あらゆる普通教育の全科目を網羅して全部を大成したるものなり　内田嘉一先生題字　谷口政德君著

第壹編　家庭教育　幼稚園

全　正價　金拾貳錢　郵税　壹錢五厘

人生道に入るの門は幼稚園也天眞の如く無心にして愛すべき我幼稚の小男小女をして正然なる教を受け高尚仁慈快濶鋭敏の志氣才能を發揮せしむるの初歩は幼稚園にあり幼稚園の重すべき言を俟たず本書は有要にして愉快平易にして簡明なる百般幼稚園の諸課目を記載せるものにして之を實行せば暇令幼稚園の設ふき僻地にあると雖も能く其の利益を得るべし世の愛兒を有する嚴父慈母若くは親切なる保姆達は一本を購讀せられよ　谷口政德君著

第貳編　家庭教育　尋常小學校

全　正價　金拾貳錢　郵税　壹錢五厘

本書は熟練巧妙の谷口君が尋常小學の程度に應じたる學科を坐ろから家庭に於て講習せしめんとて簡易に面白く密畫を挿入して動物植物物理化學遊戯の諸科を説明せられたる者也

谷口政德君著

◉第　參　編　家庭教育　**高等小學校**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

尋常小學と竝び稱せられて江湖幾萬の愛顧を得たる者は高等小學校あり本書も家庭教育の資に供せん爲めに高等小學の程度に適應したる種々の學科を丁寧に親切に說明したる良書なり

谷口政德君著

◉第　四　編　家庭教育　**女學校**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

本書は家庭教育に於ける女子の學問の資料として讀書修身禮法手工家政裁縫作文音樂躰操に至る迄女子が修むべき學科は悉く網羅して餘す所なし加ふるに多くの繪畫を挿入して其婉美ゐる性情を饒かにせり

須永金三郎君著

◉第　五　編　實業教育　**商業學校**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

幼年兒童をして他日實業界にたつの羅針盤たらんをを主とし商業上に關する地理符牒取引爲替利分等の事を詳細に說明したるものにして苟くも他日商業に從事せんとするものは本書を繙かるべし

谷口政德君著

◉第　六　編　實業教育　**農工學校**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

本書は實業家子弟の家庭用に資し殊に小學生徒の課業外に習得せしめんとて農學は普通農學豫習を主とし工學は東京職工學校實習科目により機械工藝化學工藝の二部に分ち且つ之に工藝美術の一斑を加へたり

谷口政德君著

◉第　七　編　受驗應用　**日本小歷史**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

上下三千載我日本建國の創立より今日に至る迄約して一卷となし一見して我日本國の歷史を熟解せしむる者は實に本書に若くものゐく簡潔玲瓏實に其宜しきを得たり

谷口政德君著

◉第　八　編　受驗應用　**支那小歷史**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

日本の歷史を讀むもの又東洋全局の歷史に目を注かさるべからず日本如今の開明又支那との交際に胚胎す文章又輕快流麗なれは通讀一過四百餘州の形勢躍然とし眼中に來るべし

谷口政德君著

◉第　九　編　受驗應用　**萬國小歷史**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

日本歷史をよむもの更に萬國の歷史をよまされは恰も是れ暗室の中に迷ふと同し本書は東國希臘羅馬其他中世誌近世誌にいたる迄上下數千年東西相連串せしめたる歷史の梗概を叙したるもの也

谷口政德君著

◉第　拾　編　受驗應用　**日本小地誌**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

本書も受驗者の爲めに日本の地誌を丁寧に親切に說示し又其の應用を圖らん爲めに問題を掲けたり

谷口政德君著

●第拾壹編　受驗應用　**萬國小地誌**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

受驗者の最も苦しむものは地誌なり本書は理論的現象的歷史的より萬國の地誌を簡明に說明したるものにして能く記憶力を與へん爲めに記事尤も注意を加へたり

谷口政德君著

●第拾貳編　受驗應用　**小物理書**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

本書は各官立學校及び私立學校の入學志願者をして一讀直ちに其秘奧に理會せしめんとて要を拔き粹を擧げ最も簡易明快に說明したるものなり

谷口政德君著

●第拾參編　初等教育　**小化學**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

本書は著者が後來經驗せるところにより我國に最も的切なる材料を撰びて編纂せしものにして學術進步の原理に伴ひ例の流暢の文字を以て面白く說明したり

大熊權平君著

●第拾四編　初等教育　**小植物學**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

本書は從來の刊行の書に倣はず秩序最も斬新奇拔なる分類法により初等教育には尤も了解し易き樣著者の經驗より編著されし者なり

素木眞龍君著

●第拾五編　初等教育　**修身口授書**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

本書は確言俚諺に對し逸聞奇事等高下錯綜數十篇を集め苟くも確言と俚諺とに論ずる道德の眞理を含む者は皆ゐ網羅して餘す所なし殊に文章も簡易通暢間々輕快洒落の文字を用ひたれば幼年諸子は喜んで繙き教育家又參考とするに餘りあり況んや學習院教授峯君の校閱を經たる者ゐれば世間二三の修身口授と日を同ふして論ずべからず苟くも幼年諸君と教育家諸君に論ゐく學業に從事するの諸君は早く繙讀の榮を賜へ

須永友四郎君著

●第拾六編　初等教育　**小金石學**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

一國生產上に必要ゐる地質學と至大の關係を有する金石學は近時泰西理學家の新說を總合し數十の木版を挿入し其の編纂の躰裁又機軸を出して說明したるものなり

谷口政德君著

●第拾七編　初等教育　**小地文學**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

本書は簡易平明の文字を以て能く理學教育の原理に應じ大に他日に開進すべき確實なる基礎を兒童の心智に植生し得る樣地文學の學理實形を說かれたるものゐり

中村篤三郎　鈴木倉之助兩君著

●第拾八編　**泰西近古史談**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

故大槻盤溪翁嘗て我國古今の歷史に基き近古史談の著ゐり、其の名天下に廣し、泰西近古史談は之と相對するものゐり、本書載する所は皆眞人物の逸事、偉勳、帝王の尊嚴より野人の卑賤絕世の俊傑茅室の少婦通編凡て二百題之を熟讀玩味せは絕世の偉勳と多情の花心に感激鼓舞せらるゝの際泰西一部の歷史を腦中に湧出すべし眞に教育上必要の書類なり

谷口政德君著

●第拾九編　初等教育　**作文新學**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

算術の初等教育に適する書甚だ少し偶々是ゐるも高尙にして簡單に能く兒童をして了解せしむるもの甚鮮し本書は多年教育的實驗により著述されたるものにして兒童は是を携へて

直ちに其理解力を發達すべし最初東西諸國の貨幣の種類より遂に進んで加減乘除分數等に至る卷中數多の挿畫を以て兒童の理解力の足らざるを補ひ文章又務めて簡易を主として凡て特別の場合より實理に導きたり其編纂法の如きも當時泰西普通教科書に用ふる原書等を參酌し數種の實例許多の確證を以て兒童の理解力を知らず〳〵の間に養成せんとを專一とせり本書は兒童必須の寶典とすべく又世の教育に從事する教員諸君は是を以て普通教育中最も至難なる算術を教授するの新案策とすべきなり

静岡縣尋常師範學校長　矢島錦藏君序　三田周一郎君著

第弐拾編　初等教育　**小動物學**　全　正價金拾貳錢五厘　郵税壹錢

本書は專らコリンス氏の普通動物學を根據とし他にバッカード氏の動物書等を引用編纂し務めて此繁雜なる學科をして少年諸氏の會得に便ずる最良教科用書なり

澁江　保君著

第廿壹編　初等教育　**小論理學**　全　正價金拾貳錢五厘　郵税壹錢

凡そ宇内の妙機巧用を洞見曉通するは論理學なり、人智を補助指導して言語の連絡を發明し且つ確定したる連絡及び信ずべきもの信ずべからざる事件を證明し百物の實據之に因て判然たるを得なり、從來世に行はるゝもの甚少なく偶々之れありと雖も純然たる飜譯書に過ぎず著者之を慨し泰西晩近の進歩說に據り之に加ふるに自家の見識を綜合す故に之を一讀するの人は萬有學科の說明等を爲すに於て誤りあかるべきなり

澁江　保君著

第廿二編　初等教育　**小心理學**　全　正價金拾貳錢五厘　郵税壹錢

本書は從來の心理書とは異り尤も斬新なる泰西の原書と著者の該博なる材料の決斷により秩序井然能く此困難なる學科を類別し終末には應用智力發達の便を謀り問題數十章を掲げたり

澁江　保君著

第廿三編　初等教育　**小天文學**　全　正價金拾貳錢五厘　郵税壹錢

本書は澁江保君が得意の健筆を揮ひ近時泰西諸者學が新たに發見したる天躰の諸現像を詳論したるものにして諸像の距離、形狀、大小若くは推理の天文に關しては天上諸現像の運行の自然の法則等にして近來別に新機軸を出したる良書なり

谷口政德君著

第廿四編　初等教育　**簡易地震學**　全　正價金拾貳錢　郵税壹錢五厘

本書は有名なる泰西理學者ミルン氏の地震論を基礎として其學理を應用し頻年災害並ひ臻る我地震國の爲めに詳細に其原理基因を明にし猶ほ今回の地震に照合し家屋の構造法更に進んで地震前知法を論し併せて其豫防避難に至る迄詳細に說明したるものなれは日本人か安心立命の大要書なり

澁江　保君著

第廿五編　初等教育　**小倫理書**　全　正價金拾貳錢　郵税壹錢五厘

甚哉倫理の講ぜざるべからざるや、人の世にある、出處進退語默動靜、千態萬狀錯綜窮るしといへども、要するに倫理の雰圍氣外に逃脫する能はざること、恰も魚の水を得て活し水を出でゝ死するが如し、人は之に依て生し、家は之に依て和し、國は之に依て立ち、天下は之に依て治まる、本書は廿三年十月を以て人道の淵源を示し給へる大詔に基き、人たる者の家族に對し自已に對し社會に對し國家に對し國君に對する大義務を說く、迂僻に拘ちず奇矯に流れず、能く卑近の解釋と實例とを以て、高尚なる倫理學の大綱を網羅す、教育書として家庭讀本として、苟も國民たる者の玩誦せざるべからざるの良書なり

大石兵蘊君著

◉第廿六編　**初等教育教授法**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

斯邊鎖氏ペロヂスター氏の教育論日に冷遇せらるゝの今日本書は最近泰西の新奇警靈たる新教授案を參酌し著者獨得の活眼見識を以て滔々數萬言能く其秩序證例を說き目下普通教育家の爲めに簡明肯綮に正論せり

法學士　柳川勝二君著

◉第廿七編　**普通道德學**　全　正價金拾壹錢五貳厘　郵稅

簡易なる文字を以て能く普通の理解力に相當すべき道德學の書未だ世に行はれず。本書は道德の種類より良心、德義、責任、善惡等細論して遂に自身若くは同胞に對する義務、社會或は自然に對する義務、道德に對する義務に訖る、其間例證該博議論鮮明、苟くも國民たるべきものは義務即ち道德を守らざるべからざるの理由を容易に了解し易からしむ、小學校令の所謂德性を涵養し人道を實踐せしむるの大主眼を知らんと欲するものは須らく本書を繙くべし殊に尊王愛國の志氣を發揚し實業を勵み素行を收め忠良の民たらんとする者は本書を繙くへし

澁江　保君著

◉第廿八編　**初等教育小地質學**　全　正價金壹錢五貳厘　郵稅

本書は泰西の博士アーチバルド、ゲーキー氏の新なる地質學を參酌し尤も手板ある穩安健宕の筆を以て何人にも理解し易き樣地質學の全般を說明し加ふるに數十箇の鮮明なる西洋木板を挿入し一層理解し易からしむ幾千來萬有の變現、變現地球面上屢々行はれし特異の變遷及び人類の未だ存せざりし以前の幾多の年時を經し間動植物の兩界、逐次の發育沿革は昭々として本書に詳なり

陸軍少將堀江芳介君題辭
堤劍山、矢部五洲兩君序　鈴木倉之助君著

◉第廿九編　**少年英傑尙武史談**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

本書は主ら尙武的精神を養はんが爲めに古來英雄豪傑少時の言行を記したるものにして上は日本武尊より皇太子殿下の明德に止むを而して國家の命脈を維持すべき節義勇武の精神を叙するに至つては著者實に滿腔の熱血を灑く若し一度本書を繙かは絕快絕美の英雄の眞面目を窺ふを得へく又世の小年子弟は豪傑少年の言行に傚ひ近くは皇太子殿下の明德に仰き鑑み忠武剛毅聖敕に所謂義勇公に奉するの元氣を振ふを得べし

澁江　保君著

◉第三拾編　**普通教育學**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

教育の道豈叨りに語るべけんや、教育の道を論するものあれども、眞に教育學を喝破論評したるもの實に尠し、本書は何人にも解し易き樣教育學として之を論述し、教育の必要を感して自學の念を起さしめ、兼ねて教育家か絕好の材料たらしむるものなり

松尾連君著

◉第卅壹編　**初學教育小生理書**　全　正價金拾貳錢　郵稅壹錢五厘

本書は學士フォスター氏の原書を摸範として文意明瞭にして簡約を主とし且つ其要を示すに鮮明なる圖數十個を挿入する等用意至らざるなく實に小學教員諸君の參考及ひ初學者の爲には机邊亦欠くへからさるの良書なり請ふ購ふて後其眞價を知れ

法學士高槻純之助君著

◉第卅二編 **教育新論** 全 正價金拾貳錢 郵稅四錢

教育界の師表たるもの既に陋なり誰か萬丈の光焰を吐いて逼い流行奴を警醒するものゞ、蓋し自治自活の獨立人士にあり、本書は英國エデンバラ大學教授「ジョン、スチユワート、ブラッケ」氏の自育論あり立論雄勁引證該博其智育を論するや字書的學生の痛弊を論破し觀察の機敏、想像の精渉、書籍の撰擇等を述べ其躰育を叙するや精神と身躰の關係或は攝生、飲食、其他衛生の大要を示す、其德育を論ずや、道德の必要、修德の涵養、眞實、交際、等に推及す其例を引くや希臘古典の古事より聖書詩歌の名言に至る迄蒐集して餘す所なし、苟も教育家と一個人に論なく本書を繙くの價値あり

内山正如君編述

◉第卅三編 受驗應用 **日本地理一千題** 全 正價金拾貳錢 郵稅四錢

本書は專ら第一高等中學校其他諸學校の地理例題に本つき洽く至要の問題を撰み答案を附するを實に一千有餘題初め總國編より三府幾内八道に及び丁寧反覆詳細に說明し勉めて學生受驗の便益を謀れり當今此種の書少なからずと雖も多くは繁簡其當を失して一も肯綮を得たる者なし本書此點に注意深し世人若し一たひ之を繙閱せは宿霧忽ち消散して地理界の萬象一目瞭然の快を生すべし

須永金三郎君編

◉第卅四編 受驗應甲 **物理一千題** 全 正價金拾貳錢 郵稅四錢

本書は在來の物理問答書と異あり全篇を總論液體氣體音熱光電氣磁氣雜題實地試驗例題天文地文の數編に別ち秩序を立てゝ問答體に物理の全科を說盡せしものなれば受驗志望者坐右の重寶たるは勿論此學に志ある者には獨修の良師たる可き價値あるものあり

清水直義君著

◉第卅五編 **單級教授法** 全 正價金拾貳錢 郵稅四錢

本書は第一に我邦に後來發達せしむべき單級なるものは如何なるものなるかを明かにし第二に此の制を取るの止むを得ざるものあるを陳べ第三に實地教授者をして直に依りて以て其事を爲すべき教授及管理の方法等を細說し第四に教授者其人をして殊に注意せしめんとする件を條舉したる良書也

澁江 保君著

◉第卅六編 **簡易體操法** 全 正價金拾貳錢 郵稅四錢

從來刊行の體操書は所謂柔軟體操のみを記すか否らざれば普通に行ひ難き程の危險なる體操のみを記すもの多し本書は之に異あり先づ體操の必要なる所以、體操の準備より始めて其初步には徒手體操、啞鈴體操、球竿體操、棍棒體操、木環體操、並行桿體操、水馬體操、豆囊體操より漸く進んで水平桿體操、踏鞴機體操、梯乘、繩乘、棒跳に至る迄其平易なるものを網羅し盡せり世の躰育に志ある者教師となり生徒となり必ず一讀すべきの書あり

須永金三郎君編

◉第卅七編 受驗應用 **化學一千題** 全 正價金拾貳錢 郵稅四錢

化學は實驗の學にして物理と相並び科學の最も研究に難きものゝ一に屬す此を以て少年學生動もすれば此科の試驗に失敗し空しく博を呑んで止むもの少からず著者夙に之を患へ曩りき物理一千題と對して此書を編す此書は在來の化學問答書と異り秩序を立てゝ問答體に化學に全體を說き盡せしものあれば受驗志望者の爲には左右の重寶たるは勿論此學に志ある者には獨修の良師たる可き價値あるものの也

◉第卅八編　受驗應用　**日本歷史一千題**　全　郵稅四　價金拾貳錢

本書は主として受驗用日本歷史の問題に付其答案を附したる者にして、明細に記述するを殆んと一千餘題、其編述の順序は第一編上古史、第二編中古史、第三編近古史、第四編近世史、第五編今世史、第六編諸學校實地入學試驗問題、第七編には附錄として日本歷史重要年代史を附す、本書の論する所概ね是の如し、故に日本歷史の研究には必要缺く可からず、獨り小學校學童の良範たるのみならず、中等教育の階程にある者又一閲せは其裨益する所多かるべし

英國スミス氏原著　澁江保君譯

◉第卅九編　**代數一千題**　全　郵稅四　價金拾貳錢

本書は有名なるチャールス氏の「エレメンタリー、アルゼブラ」を譯述したるものにして每章必ず原理を述べ應用を說き又數多の例題、問題、雜題を掲けて讀者をして一目瞭然代數學の大躰に通曉するを得せしむ學生諸君は勿論、諸學校入學試驗若くは教育檢定試驗を受けんと欲する諸君は携へて最も妙なるべし

英國ウサルソン氏原著　澁江保君譯

◉第四十編　**幾何一千題**　全　郵稅四　價金拾貳錢

本書は目下世上に持て囃さるゝウサルソン氏の「エレメンタリー、ゼオメリー」を譯述したるものにて線、面、角、圓、面積、比例等の原理より其用の點に說き及ぼし又問題を設けて以て應用に便ならしむ此學を修めんと思ふ者は先づ此書より入らざるべからざるなり

西村茂樹先生序文　伊藤武壽君著

◉第四十一編　**國民道德論**　全　郵稅四　價金拾貳錢

我明治の道德裸躰となれり夏士豈秋風落日の悼歌なきを得んや新生の美風また起らず舊採の頑陋直ちにしらす學者又混々として道德の迷妄に入れり此時に當り著者慧眼一喝國民道德法撰定の方針を論し世上流行の道德論を罵倒し更に進むで最新最鮮の國民道德を扶植し最上文明の彼岸に達せしむ獨立大帝國の光輝を發せしむる原動力として之を說くや痛論豪宕積誠の熱火焰々聲あり論豪宕併せて將來我日本帝國の採らさるへからさる一種固有の道德を擧げ遠く千古に照らし近く近代に鑑み其眞粹純美の良風を擧げんをを奬勵せり

帝國文科大學教授栗田寬先生講述

◉第四十二編　**勅語講義**　全　郵稅四　價金拾貳錢

本書は栗田寬先生が弘道學會に於て、明治廿三年十月下し給へる、教育勅語を講義せられたる者にして、古來三千五百有餘年萬世一系の帝統を戴き、能く國躰の精華を發し、忠良の臣民たるべき大道を、周意懇切に說示したるものなれは、苟くも日本國民たるものは一讀せさるへからす

順永金三郎君編述

◉第四十參編　受驗問答　**博物一千題**　全　郵稅四　價金拾貳錢

此書は官私立學校の入學試驗教員及ひ其他の學力檢定試驗に應する者にして受驗の參考に供せしめん爲め編纂したるものにして全編を動植礦物及び實地試驗問題の四編に分ち問答體に博物の全科を說き盡したるものにして全編を動植礦物及び實地試驗問題の四編に分ち問答

靜岡縣尋常師範學校長矢島錦藏君序文

伊東琴次郎君著

◉第四十四編　**胎內教育**　全　郵稅四　價金拾貳錢

英雄畢竟馬頭の塵、艨艟由來海底の鬼、富國强兵を說くもの。文明進步を論するもの、先

つ胎内教育の要を辨すべき也、三才の兒の精靈百歳まで、是實に幼時の活動力に富ゆるもの、他日有爲の人物となるの大證言にあらずや、あゝ嬰兒の健全は國家活動力の最大源泉、他日我日本帝國か、更に好運隆々たる新世界の日光を仰くの根底にあらずや、從來胎内教育は世人が暗黑の中に投し去りたる問題なり、本書之を說くを詳密、胎内教育の必要より、父母の義務、若くは住居、見聞の美醜喜怒哀樂の感情等、皆教育的眼孔を以て一々實地學理に參照し之を痛論す教育界の君子は勿論若くも日本國民たる者は一讀の勞を採らさるべからず

大宮宗司君編述

◉第四十五編　受驗問答　**國文學一千題**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

本書は官私立各員校の入學試驗及び師範、中、小學校教員の學力檢定試驗等に應せんとする者をしてその受驗の參考に供せむがため國語國文に關したる學科をとり集め順序を立て問答體に編したるものなり

杉山正毅君著

◉第四十六編　**實驗學校管理法**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

韓淮陰曰く多々益辨ずと夫れ多々益辨ずる所以の者は他なし法を以て之を統ふるのみ教育家は猶兵家の如く能く管理法の精妙を極むる時は千百の兵徒數十の教員を統督して教育の實蹟を奏するを皆意の如くならざるはなし杉山正毅氏多年職を督業及學校長に奉じ得る所の經驗少なきにあらず今其蘊底を叩き盡して一部の實驗管理法を著す綱張り目舉り管理の法方秩々整々として彼の耳學の輩か旬月の間に歐人の著書を譯したるか如きものに比すれば迥然として天地の別あり世の教育家幸に一部を購讀せば韓淮陰の所謂多々益辨する盖し期し難きにあらざるなり

澁江　保君著

◉第四十七編　**簡易手工學**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

人は頭腦を有すると同時に四肢を有す故に啻に精神的の練磨のみを以て足れりと爲すべからす以て又實物の觀察力を養ひ手指の運用を機巧ならしめざるべからず是れ手工の普く一般に必要ある所以なり然れども手工を普通教育の中に加へたるは歐米諸國に於てすら晩近の事にして我が邦に於ては今猶創業に屬し完全の手工を授くる學校少なく完全の手工を述べたる書籍なし本書は可及的の限に於て手工に關する諸般の事項を載せ以て完全に近きを期するものなり

澁江　保君著

◉第四拾八編　第四拾九編　**算術五千題**　全二冊　正價金廿四錢　郵稅八錢

本書は新著出版を以て有名なる米國新約克府アップルトン商會の發兌に係れる算術教科書に基き傍ら諸書を參考斟酌して編纂したるものなり而して原書は同國の博士ラッノー氏が彼の國の中小學教科用に供せんが爲めに多年の腦漿を絞りし者なれば發兌以來僅々五葛裘にして既に十三版を起すに至れりと云ふ其適切なる推して知るべし今や其の中彼れにのみ適するものを改めて悉皆我れに適切ならしめたれば師範中小學校に用ゐて妙に又教育檢定受驗者は携へて最も妙なるべし

岸上　操君編述

◉第五十編　**漢學一千題**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

東洋の大帝國支那の國學たる漢學は千餘年來亦我が大日本帝國の普通學となり來れり、近年我が國學勃興し英學傳播し佛學流行し獨逸學擴まり魯西亞學行はれ、而して漢學の行はるゝこと依然たり、然れども漢土の學たる文字數萬經緯幾億、端緒も亦隨て甚だ多く、初

學の爲に津梁に迷ふこと甚だ免れ難きものあり、今此書は經、子、史、文、詩、典故、雜の七門に分ちて其要を問答し簡易明詳不知不識の間に此學の概梗を知得せしむ且許多の切要なる事項を附錄としたれば受驗者獨學者共に藏書乏き者の無上の參考用書なり

幼年雜誌記者坂下龜太郎君著

第五拾壹編 少年必讀 **理科遊戯** 全 正價金拾貳錢 郵稅四

本書は皆實驗し得べき理科的遊戯九十餘種を掲げ加ふるに鮮明美麗なる數十箇の挿畫を以てしたるものにして理化學數學幾何學工藝に關する面白き問題は幼年諸君が喜むで解釋せんとする所なるべし殊に本書は著書が數ヶ月の苦心發明と泰西諸國に於て近來演劇するものと實地技師につき其手術を質したるものゐれば一讀すれば手品魔術を見るが如く再讀すれば理化の仙鄉に遊ふが如けん

内山正如君編述

第五拾二編 受驗問答 **支那歷史一千題** 全 正價金拾貳錢 郵稅四

支那帝國は世界中最古の國にして其文明速かに發達し上代既に燦然の光を放てり而して其疆土廣大にして英雄豪傑の崛起治亂興廢の樣跡歷々證すべし故に其歷史は以て世界の大歷史と稱するに足る本書は支那歷代の治亂を明かにし太古史、中古史、近古史、近世史、今世史の五篇に分ち唐虞三代より光緒、今代の勃興に至るまで丁寧反覆其要を擧げ以て諸學校の入學試驗問題に對するの答案を附す世に支那國の歷史と稱する者は徒に煩冗に失して未だ其正確を知るべきものゐし請ふ入學試驗の問答に傾意するの君子速に本書に就て其鴻益を領せられんことを

村上秀吉君著

第五拾參編 **支那文典** 全 正價金拾貳錢 郵稅四

支那に雅文あり俗文あり如何に博文能文の士といへども雅文にのみ深き眼光を以てしては一行半句だも猶俗文を讀過する能はず他あし雅文には自ら雅文の法あり俗文には自ら俗文の文法あれはなり本書は支那俗文の文法を丁寧懇切に說示せるものにして一たび之を研究すれば讀み難き解し難き支那の俗文を容易に讀み且解するをを得るのみゐらず其文を自得し自在に俗文を搆成するを得るに至らん今や文那文學熱已に其頂巔に達す此時に當て此好著ゐる眞に時人に惠するものといふべし四方の君子幸に購讀の榮を賜へ

文科大學漢文專修科卒業生安原富次君著

第五拾四編 第五十五編 **漢文講讀法** 全 正價金廿四錢 郵稅八錢

物皆順序あり方法あり其順序を追ひ其方法を明にするときは整々條々として事の成就を告ぐると容易なり漢文購讀法は漢文素讀の順序方法と講義の順序方法とを詳に序述したるものにて著者が老練ゐる經驗を以て平易に懇切に其秘訣心得を後學者に傳ふるに老婆心に至ては實に周到なりといふべし今や漢文大に流行す後進の士此書によりて素讀及購讀の順序方法を了知せば無用の勞苦を省きて容易に漢學の上達を計り得べし天下の漢學研究に從事するもの請ふ一書を購求して其功の空しからざるを知り賜へ

幸福散史澁江保君著

第五十六編 **希臘羅馬文學史** 全 正價金拾貳錢 郵稅四

希臘の山秀で水清き所嘗て歐洲文明の源泉たり羅馬の城高く刀閃く所曾て宇内壯觀の吹鼓たり苟くも第十九世紀文明の大躰を探り其濫觴を廣め近代文明國の故國に逍遙せんと欲する者は先づ希臘羅馬の文學を知らざるべからず本書希臘文學史を說きては上古雅典衰世の文學を詳說し其文華の偉觀壯麗を叙し羅馬文學史を述べては文學の第三期に分ち其豪宕雄活を論ず時に悲歌樂詩短長歌の眞粹ゐり時に悲笳秋風を學ふの衰世文學となる發して王政時代の文學となり進むで其發達となり戲曲となり散文となり哲理文學となり帝政時代の修

辭學小說となる其文學の變遷により其隱微により社會の事情を解剖し提躍し來らば其快味豈に文學上の趣味のみならむ正に希臘羅馬文明の急流に棹し左顧右盼両峯の風色應接するに遑あらざるべし

幸福散史澁江保君著

◉第五拾七編　**獨佛文學史**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

本書は獨逸佛蘭西兩國上古より現時に至る迄の文學の沿革を明かにし有名なる詩文戲曲家小說家史家哲學家論文家等の傳記特說及び其著者の性質大意等は勿論殊に諸の有名なる戲曲小說の筋書に至る迄詳細に叙述したるを以て一たび卷を繙かば兩國今古の文學を味ふを得べし

幸福散史澁江保君著

◉第五拾八編　**英國文學史**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

英文學は早く文學の巨眼に入れり其痛脆沈壯能く國民の性情を表す英國の文學は既に一千五百餘年前に發し索遜文學より更に發達してエリサベス文學隆盛の原因となり萬國無雙の戲曲家シエクスピヤを生じ或は古學時代に變遷し文學の明光赫々として更に平民的文學を照らし雄文豪快なる史家兼批評家マコーレー卿躍り出て全歐を壓倒し其謳歌宇宙に轟く最近小說家の兩雄デッケンス。サカレーあり若し一度本書を繙かば人は企業に鋭に國は財貨に雄に煙筒林杆相混ずる英國社會の內に幽靜冷婉なる一個の天地の美觀樂園に驚くべし

京都同志社大學教授松浦政泰君著

◉第五拾九編　**應用文章學**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

本書は著者腹筒富贍の文思により文章作法に關する方法を平民的美文趣味に面白く親切に說明したるものにして其例證する所日本古今の有名なる和歌、詩文等數百を網羅し其好むところを擇ばしむ殊に著者が學生教授の經驗より得たる便宜なる新法に因て說明したるものなれば文章に志ある人は勿論學生諸君には溫かなる同情を得べきなり。

澁江保君譯述

◉第六拾編　**初等三角術**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

本書は目下世上に流行する英國數學の大家ケーシー氏のエレメンタリーツリゴノメトリー第三版即ち最新版を一言一句を漏さず悉く譯述したるものにして殊に譯者が多年の經驗に據りて初學者に解し易きを旨とし譯文最も平易確實なれば此學に志す者座右に欠くべからざる良書なり

ケーシー氏原著

安原健堂君著

◉第六十壹編　**和漢譯文法**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

明治文章の統一夫れ何の時にかある物語文あり戰記文あり小說文あり書牘文あり漢文あり紛糾錯亂各長を量り短を較べて是非を爭ふ靈眼一點早く和漢文の粹美を打つて一丸となし巧みに融合渾和して雍々大雅の眞文章を作らんことを論したるは本書なり著者才藻の富贍好學の餘藻之を叙するを尤も明暢快晰譯文の要旨を論じ直譯義譯の別を說き更に和漢文の文質を舉げて之が難易を知らしめ漢文の巧拙を採摘し譯文の叢話譯文の特例皆文に志す者の腹筒を裕かにす鼇頭別に字義文體の解釋あり讀者之に因て筆を下さば其文の都雅適麗なる源氏文の如く其雄俊勁拔なる史記の文の如くなるを得む。

角田音吉君編纂

理學博士伊藤圭介先生校閱

◉第六拾二編　**簡易園藝法**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

園藝の術は國運の隆盛と開明の深淺により盛衰變化するを屢々なり我國維新の革命は大に

風俗の變遷を來して其好惡を一變し果樹栽培の路太た盛ふりと雖とも獨りかの花木盆栽を培養して雅客の需めに應せるもの若くは假山を築き泉池を鑿ちて庭園の構造を事とするものは皆殖産興業の聲に壓せられて用ゐられす本書は凡て本邦の園藝に關する改良法を論し之か挽回策を講したるものにして果樹栽培は益々其精巧を加へ花木盆栽培養庭園構造の方法は更に實益と美術を渾和したる一大方案を畫き皆學理に據り經驗に徴し太た簡易に之を說明せり苟くも園藝の利を收め園藝の美を味はんとするものは本書を購ひたまふへし

農學士澤村眞君校閲　小松喜平治君譯述

◉第六拾三編　**實驗化學**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

化學は萬有一藝の祖歐洲各國の富强之に因せさるはなし之を內にして家庭の美なる工藝を生み之を外にして一國の大なる生產を益す而して近時世に行はるゝ化學の書は理論高尚手術錯雜にして之を實驗すること太た難し近時歐米に行はるゝ化學に就き本書は實驗化學として非常に盛名を博したるものにして日常家庭の裝置に於ける者より凡て實用に關する工藝は實驗し得べき方法を以てし其理解力を敏ならしめん爲め挿畫を加へたれば苟くも工藝に志あるの人は勿論何人も本書をとつて之か實驗の快をとれ

內田不知庵君著

◉第六拾四編　**文學一斑**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

文界漠々として常闇の國に似たり爲に本書は文學の義を明かにせむ爲め即ち叙事詩叙情詩及び戲曲を一々我國の詩歌俳諧の壇上に游ふ者は本書を一讀して苟も小說を愛好し詩歌俳諧を必らすや新たに發明する處あらむ　**ホーエトリイの三種**

三木貞一君校閲　齋藤良恭君編述

◉第六拾五編　**少年育才文園遊戲**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

才情油の如くに湧き文思泉の如く涌流れ詼諧百出優に人を快樂の園に投する者是本書の獨領なり淸人曾て文章遊戲の著あり本書は東西古今の文學上凡て遊戲に係る者を纂む文章の爛爛炫燿なる千紫萬紅の春風に笑ふか如く和歌の優美雅麗なるは淸溪碧潭明月の映するか如く唐詩の豪宕雄拔なるは高山峻嶺の雲際を摩するか如けん天地間の美妙粹英集めて本篇にあり若し夫れ少年諸君講學の餘暇正課の傍ら之に由て遊戲せば放朗たる天宇に接して百花の園に遊ふが如く其練才熟能の道に於て得る所たる大ならん

西大條規君校閲　是石辰二郎君序文
佐藤時彦　大久保千代吉
鎌田勝之進　杉田金太郎　四君編

◉第六拾六編　**尋常小學教授法**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

一國の文明の根本は教育制度にあり、而して教育制度は普通教育にあり、本書之か教授法を論するや、一に心法を以て本とるし、殊に現今諸教育家の稱道する所の、學理原則を折衷して、教授の充全を論して遺す所なし、凡て小學校教則大綱の趣旨にして、著者か積誠の熱血を灑けり、苟くたる方法を縷述し、凡て小學校教則大綱の趣旨にして、著者か積誠の熱血を灑けり、苟くも普通教育に志すの人は採て本道の指鞭とせよ、

諸官立學校受驗者必讀　村松直一郎君著

◉第六拾七編　**入學試驗問題答案**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

都下十萬學生空しく涙を呑み恨を負ふて學海の波浪に蕩搖せられ往々破船の可憐兒となるもの多く其航行の針路を誤るに由る本書は實に是等學生の爲めに就學の指針を得せしめん

とて府下各學校の入學試驗問題を蒐集して其標準を知らしめ其擬答案の如きも勉めて綿密に解釋を加へたれば一に受驗者の參照に供すべきのみならず又傍ら獨修者の師友たるべきなり附錄には文官普通試驗問題を掲げ更に前途自活の途に稗せしむ本書は實に是れ學海航路の指針たるのみならず又處世自活の資料を與ふるものかの青雲志望の少年才子豈又行路難を唱ふの愚を爲さん

小中村義象君序文　須永金三郎君著

◉第六拾八編　**通俗學術演說**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

一讀の下に世の少年子弟をして百科學術の大意を知らしむるは實に本書の特色なり科學の性質より政治行政經濟財政法律哲學社會心理歷史地理簿記金石天文等凡て萬有の學科皆瞭然として本書にあり

法學士高櫻純之助君序文　坪谷善四郎君著

◉第六拾九編　**通俗經濟演說**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

世運一轉各種農工商業の創設市町村會、府縣會より帝國議會に至る迄直接間接に皆是經濟事業に非らざるはなし歲出入豫算、地租輕減民設會社保護、諸稅則の改正、收支出納の得失等比々是あり苟くも今後の日本人民たるもの經濟理論を實地に應用するに非らずんば自已の財產名譽を安全に保つを能はざるべし本書は經濟に關する一切の事項を簡易卑近の文字もて丁寧に述べたるものにして初學者一度之をよまば容易に經濟上の要領を知るを得べく殊に社會に偉大なる勢力を有する農工商の實業諸君は宜しく本書を携さへ常に其經濟智識を涵養せらるべし

法學士城數馬君序文　宮川大壽君著

◉第七拾編　**通俗法律演說**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

本書は童蒙婦女にも解し易き樣極めて平易に極めて簡單に法律學の大旨を演說躰に解釋を附したるものにして法律の必要益々甚しき今日何人も之を一讀せば大に其思想を發達せしむるを得べし

坪谷善四郎君著

◉第七拾一編　**內外豪商列傳**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

壯快の筆を以て壯快の傳を叙し讀者をして頑夫も廉に懦夫も志を立てしむ是れ本書の目的あり方今世上治平無事亦兵馬革命の變に乘じて身を立て名を成すこと能はざるも幸に商業市場の活勢を利用し波瀾高低の危機を屢まば空拳徒手より起りて碧瓦白壁の內に住することを難しとせず有爲の材を抱くの士が身を立つるの道は一に此に在り而して其商業場裡に馳騁し危機活勢の間に縱橫するには如何せば可あるか是れ本書の明かに指示せる所あり

澁江保君譯

◉第七拾二編　**處世活法**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

本書は英人マッシュース氏の原著にして人間處世の要道を詳述し自家の精神事業の成功幸福の運否等に關して獨自一個の卓見を具ふ譯文も亦平易流暢にして或は原書の足らざる所を補へるもあり之を一讀せば一身事に當るの精神意匠行爲より一家の經濟に至るまで明確精細に之を知るを得べく誠に人生重寶の好書あり

英國サー、ジョン、ラボック氏原著　澁江保君譯

◉第七拾三編　**處世方針幸福要訣**　全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

人生の目的は幸福にありとはスペンサー氏が千古の金言、洋の東西時の古今を問はず、男女幼老貴賤貧富、皆な勤苦を辭せざる所以のものは、畢竟幸福を得んが爲あり、然れども適意の事乃はち是れ幸福なるべしと雖ども、人心の不同あること其面の如くなれば、各人

の幸福必ずしも同じきを期すべからず、而して各人皆其の欲する所を遂ぐるには如何せば可るか、是れ此の書の詳かに敎ゆる所なり、苦を避け樂を求むるの人は請ふ、先づ此書を繙いて人生の幸福を全ふするの道を究めよ、

英國ブラット氏原著　澁江保君譯補

◉第七十四編

福之神

全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

本書は英人ブラット氏の原著マムモンを譯述したるものなり金錢の社會上及一個人に於ける勢力關繫及び得利成功の順道を詳論せる書にして其大なる點よりいへば事業成功の活法、利益增進の秘訣とも稱すべし且書中處々に的切なる實例及古今の學者傑人等大小の經濟に關せる金玉の格言を挿みたれば苟も身を立て家を興さんものには最上の寶典たるべし其文章は通俗簡明にして文章極めて平易にして何人と雖能く高尚なる趣旨を會得するに足る

原坦山老師題辭　內山正如君編

◉第七十五編

萬國宗敎大意

全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

現今社會に處して世界宗敎の定義起原發達及び其敎理等を悉知し其國勢に適すべきものを撰び國家人民の幸福安寧を企圖すること最も今日の要務といふべきなり然れども萬國の敎種其數少からず從て諸般の敎義に達すること容易ならず之れを要するに其綱領を示すの珍書に據り以て敎界の動靜を知るを得ば最も便ならんか本書は此の必要に對し佛敎耶蘇敎各國神敎等を數編に分ち周到綿密に其要義を示したるものなれば有志者の爲めには一日も坐右を去るべからざる寶册といふべし殊に其終編には各敎開立の祖師傳を揭げ又附錄として通俗哲學大意をも揭げたり

秋山行藏、石川豐太郎兩君編

◉第七十六編

實用帳合活法

全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

商家

兵家第一の要は成竹立つに在り商人第一の要は帳合整ふに在り本邦の在來の帳合は粗に過

ぎ一見損得を明かにするに足らず所謂簿記法なる者は西洋直譯の法にして間々本邦の商家の實用に適せざる者あり本書は能く邦人的實なる簿記法を擧げ其性質書式を解明し表示せるものにして商家農家工業者に至るまで一切必要なる帳合法を擧げ極めて詳密明確なり今や商法實施の期迫り商家たるものは法律上亦帳簿を改正整頓するの責あり苟も本書に依らば出納損得を明かにす可く商戰場裏に馳驅して大勝を獲るを難からじ

飯島半十郎君著

◉第七十七編

家專經濟書

全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

本書は著者嘗て文部省に於て編纂したるものにして我國先輩の說及歐米諸大家の說を折衷し衣服飲食家屋より經濟の大旨學理上實際上より詳說し篇頭には金言要語集あり

栗本鋤雲先生題字　幸福散史澁江保君著

◉第七十八編

通俗敎育演說

全　正價金拾貳錢　郵稅四錢

敎育の何者たるを知るは一般國民の義務にして此等の學術を容易に說述し德育知育躰育より衣服飲食に至る迄一々證例を擧げ敎育の必要を知らしむ世の父兄子弟たるもの本書を讀むて其方針の指南車とすべし

岡村增太郎君著

◉第七十九編　初等

作文一千題

全二冊正價金廿四錢　郵稅八錢

第八十編　敎育

著者多年敎育界の經驗と熟練とをもつて、殊に小學兒童の爲めに作文の思料に供せむとて編述せられたるものなり日用品食什器の事より仁義、忠孝、物理、植物、動物、地理等凡て宇宙萬般の事物にかりて其例題を示したるものあり上卷は日用文、下卷は漢字交り文、其例題凡て一千題、苟くも兒童が其目にふるゝ文思の材料とするべきものは、皆此裏に網

羅せられて餘す所なし、小學校生徒諸君、幼年諸君本書を座右に備へば、咄嗟の間に作文を練習するの用に供することを得べし

幸福散史　澁江保君編

◉第八十壹編

雄辯法

全　正價金拾貳錢
郵稅四錢

西哲曰く雄辯は世界の女帝なり八苟くも辯舌に雄なるときは公衆の心を左右し之が嚮導となるを難きに非ずと然らば雄辯法は社會に勢力を得べき手段を教ふるものたらずんばあらざるなり本書は弘く英米諸碩學の雄辯法中より精を撰び要を撮み傍ら譯者の意見を加へて編纂したるものにして首尾整齊字句簡明世間に有りふれたる雄辯法の比にあらず殊に古今無雙の雄辯家希臘のデモステニス羅馬のシセロを初として雄辯に雷名を轟かせし十數大家の演說を譯載したるに由り啻に其議論話法の愉絕快絕たるのみに止らず十數大家の精神は自ら紙上に躍り出でゝ讀者の爲めに指南車たるの勞を執るべし

梶原藍山君著

◉第八十貳編
第八十參編

受驗必携

中學豫備門

全二冊正價金廿四錢
郵稅八錢

學海の航路是より東せんか、西せんか、北せんか、南せんか、此中流に棹す者は、則ち中學生なり。中學は學海の球を採るべき、第一金鍵なり。本書は中學入學志願者の、便に供せんとて、倫理、國語、地理、歷史、理科等、凡て入學試驗に必要なる、科目は悉く網羅して餘す所なく、能く其要を摘み、粹を拔く、故に一度本書を携ふれば、更に數冊の書を求むるの煩なく、一舉して中學の門に入るを得べし。此書一冊實に是れ中學豫備門なり、登第者なり、保證者なり。

吉田收吉編

◉第八十四編

新撰

男女遊戲法

全　正價金拾貳錢
郵稅四錢

少年男女遊戲の法、我國古來種々ありと雖も、或は衛生に害あり、或は危險の虞あり、或は時に風教を傷つくるものあり、眞に能く衛生を助け、風教に補裨して、而かも危險の虞なるものを求むれば、甚だ少なし、是れ世の任に教育に當る者と、子女を養育する者の、久しく遺憾とする所なり、本書は獨逸に於て數多の教育家が多年の實驗により、最も安全にして、且つ有益に殊に興味多く、男女の少年が樂しんで遊戲する間に、衛生を補ひ、知德を啓培すべき、數多の方法を集めたる者を譯譯したるなり、世の教育家、又は女子養育の責を負ふの人々は、一本を備へて、以て少年の風俗と衛生とに改良を加ふべきなり、若し夫れ之れを以て各小學校の賞品に供するが如きは、蓋し適當の好材料なるべし。

梶原藍山君著

◉第八十五編
第八十六編

官立學校入學試驗

及第秘訣

全二冊正價金廿四錢
郵稅八錢

文物日に開け、教化月に渥ねく、年々歲々筴を負ふて輦轂の下に集り、各種の官立學校に入らんと欲するもの數十萬人あり、然れども之に入るには嚴正なる試驗を受けさる可からず、爲に其の試驗の關門を過る能はず、空しく志しを齎らして門外より歸る者、常に十中七八に上る、其志憫むべし、而して其の關門を過る能はざるは、一に試驗の問題に對し適當の答案附をする能はざるに由る、此に於てか豫め其問題の常に如何ある種類あるかを知り、且つ之に對して如何ある答案を附すれば可なるかを知ること、此等入學受驗者の爲めに極めて必要とす、從來之が爲に、試驗の問題を集めたる書少からざるも、之に適當の答案を附し、以て受驗者の參考に供したるもの稀なり、本書は最近各官立學校の入學試驗問題を悉く網羅し、且つ一々適當の答案を附したり、凡そ受驗に志ある者之を繙かは、以て試驗問題の標準を知るべく、亦答案を作るの如典型を得べし、此の如くして試驗に應ず其の及第の榮を得ることは、蓋し物を囊中に探るか如くなるべし

小宮山綏介先生題詩　内藤燦聚君著

◉第八拾七編
第八拾八編

近世大儒列傳

全二冊　正價金廿四錢　郵税八錢

德川三百年間の治平、學者雲の如く、才傑林の如し、文物典章の花、忠孝節義の實、日本歴史第一の盛觀とゐす、本書は近世の大儒藤原惺窩より藤田東湖に至る迄數十餘名の傳記を網羅したるものにして、上慶元に始まり下維新に終る。學者滿腹の經綸、異色錯然として一大幻燈を見るが如し、浮誇豪宕の漢學、俊美婉曲の和文、哲學を主張するもの、開國を論議するもの、經濟の長策を建つるもの、文運の敎育を陳ふるもの、有德の君に、卓落の偉人、文學者宗敎家の集つて本集にあり、

幸福散史澁江保君著

◉第八拾九編

社會學

全　正價金拾貳錢　郵税四錢

宇宙の間、國の文明と、野蠻とに論なく、人類の生息する所、必らず其始め混沌たる原人、禽獸を距るを遠からず、其間に於て、優者は存し、劣者は斃ほれ、自然淘汰の作用を經て、先づ酋長起り、上下の別の生じ、終に君主と人民の別を生じて國家を組織し、宗敎以て人心を式配し、敎育以て人心を啓發し、法律を設けて行爲の規則を定め、刑罰を加へて不逞の徒を懲らし、運輸交通を便にして人間の生活を高尚にし、生産貿易を勸めて各人の福祉を進め、海陸軍備を具へて内外の禍亂を戡定し、行政百官を任用して一國の政務を行ひ、以て文明の邦國に入る、是れ社會進化の順序にして、社會學の敎ふる所、他の國家、政治、經濟、法律、宗敎等の諸もろの關係は、總べて此の社會組織の間に起る、故に社會學は他の各種の科學の基礎なり、本書之を論ずること簡にして能く盡せり矣、

吉田正雄君著

◉第九拾編

女子算術書

全　正價金拾貳錢　郵税四錢

從來女子の爲めに撰したる算術書なる者あらす本書は特に女子の爲めに算術を說明したるものにして凡て女子か成長して家事經濟に於ける運算の妙部を知らしめんとて皆日常の問題を取り來て他日活用の素を養成せしむ故に一度本書を繙かば從來の輕浮なる理論を脫して明かに家政に於ける數學問題を解釋するをを得べし。

幸福散史澁江保君著

◉第九拾一編

哲學大意

全　正價金拾貳錢　郵税四錢

曰く唯物派、唯心派。曰く一元論、二元論。曰く純理派、實驗派と。派を殊にし、統を異にし、各々一隅に旗幟を立てゝ、世人をして何れに歸向すべきかに迷はしむるものは哲學なり。本書は獨り西洋古今哲學の大綱を明かにし、其系統を分ちて一目瞭然たらしむるのみならず、兼て東洋哲學、即ち日本、支那、印度の哲學諸派を詳かにし、又哲學其物に於ては哲學原理より始めて、論理、心理、倫理、社會、法理等の諸科に至るまで、簡明に說き明かし、さしも難解なる哲學を容易く理會すべからしめたるものなり

木村痩仙君著

◉第九拾貳編

普通消息文典

全　正價金拾貳錢　郵税四錢

最も日常必要にして最も世人に忘れられたる消息文今尤も親切なる方法を以て消息文の性質より消息文中に於ける種々の用語及び消息文書法に至るまで太だ直截に太だ面白く叙述せり

學習院教授峯是三郎君序文　多田房之輔君著

第九拾參編　學校家庭

連絡の方法

全　定價　金拾二錢
郵　稅　金四錢

教育の實效を奏せんには學校と家庭との二者偕に提携して相互の氣脈を通じ彼我の事情を詳にせざるべからずと雖も未だ之が良方法を得ざるは心ある教育者の常に遺憾とせる所なり本書は著者が多年師範學校小學校等に從事し其研究と實驗との結果を記述せしものにして斯道の爲めには實に一燈明なりと云ふべし

宮城縣尋常師範學校助教諭　大宮宗司君著

第九拾四編　初等教育

日本文典

全　定價　金拾二錢
郵　稅　金四錢

帶には短く襷には長しとは、何物にもよくある者なり。今我國の文法書に、初等普通中等とその種類甚だ多けれども、或は煩雜に渉り或は簡にすぎて、何れも其要をえず。然るにこの書たるや、こゝにその長短を折衷して、著者信切に說明せられたる者なれば、初めて文法を學ばんと志す者には、要領その宜しきをえて、一讀判明なるや疑なかるべし。

第九拾五編　第九拾六編

歷史研究法

全二冊　定價　金廿四錢
郵　稅　金八錢

澁江保君譯述

ヘーゲル原著

方今歷史の學日を逐ふて流行し、史籍の世に公にせらるゝもの汗牛充棟啻ならざれども、史學の原理を明かにし、其研究の方法を詳かにしたる書甚少なし、本書は獨逸國の碩學ヘーゲル氏の歷史哲理講義を譯述したるものにして、上卷には先つ歷史に三種の別あるとより說き起して、原史、講史、論史、各自に詳說し、此世界は道理の支配する所たること、歷史は精靈發達の經歷たること、精靈の目的は自由に在ることを論し、以て國家の盛衰興亡、政体の良否等に及ぼし、又地理學上及び其の他諸種の論據より以上の件々を確め、下卷に於ては支那、印度、波斯、猶太、埃及、希臘、羅馬、其他古代の東洋諸國及び今日の歐洲諸國に前述の件々を適用して一々論究したるが故に、史學に志す者必讀の良書と云ふべきなり

ウサルソン氏原著　澁江保君譯述

第九十七編

人類學

全　定價　金拾二錢
郵　稅　金四錢

史學を修むる者は必す人類學と兼ね修めざるべからず。否らざれば吾人の祖先は如何して此の世に出現せしか、出現せし當初は如何なる狀況なりしか、如何して文明の端緒を開きしか、如何して文明の高度に進みしか等の要件を知り能はざるべし。本書はウサルソン氏の人類學を其の儘に譯述したるものにて、人類の起原、人類の祖先、人種の區別、宇宙に於ける人類の地位、言語の起原及び區別、文明の進歩等を委しく說き明かし、且つダーウサン派、即ち進化論派の意見とアガシッズ派、即チ創造論派の意見とを一目瞭然たらしめ、又附錄には、クイラー氏の古物學を載せて、第一世界及び第二世界なる兩前世界の有樣を明かにし、第三世界なる現今世界との關係を示したれば、人類學幷に古物學に關する諸書中に於て最も簡明適切なる良書と云ふも決して不可なかるべきなり。

羽山尙德君著

第九十八編　初等教育

作文眞訣

全　定價　金拾二錢
郵　稅　金四錢

文章は人たるもの學ばざるべからざるの要道たり此書部門を讀書、文法、作例、文字、文話の五種に分ち而して門中又數種の小部類ありて其要道たる文章を作る方法を敎ふる事極て正格に極て平易に極て懇切にして恰も老翁の兒孫を指道するが如し斯の道に志すもの宜しく一讀して其眞訣を悟るべし

渋谷道玄坂 玄誠堂

澁江保君著

第九十九編

西洋事物起原

全定價金拾二錢
郵税金四錢

事物起原は、謙遜して言へば、文明史、哲學史、科學史等に好材料を給するものたり、自負して言へば、是れ等の諸書を網羅して、其萃を拔きたるものなり、故に其の緊要なるとは多辨を費す迄もなし。本館曩きに本朝の事物起原を刊行して之を寸珍百種の中に收めたれども未た西洋の事物起原と合はせて雙玉たらしめんとす所なりき。依て今回本書を世に公にし本朝の事物起原と合はせて雙玉たらしめんとす。竊かに遺憾とする所なりき。本書は編者羽化生英獨三十餘部の書中より摘要編纂したる所にして、天文、地理、政治、社會、學問、工藝、教育、宗教、衛生、商業、農事、家屋、衣服、飲食、器財、貨幣、遊戲、諸禮、動植物、雜事の二十門に大別し、更に一千餘條に小別して、各條其の起原を詳かにし讀者をして一目の下に事物の起原を明かにし、文明發達の經路、哲學科學の進歩の狀況を瞭然たるを得せしむるものなり。

澁江保君譯述

第百編

電氣世界

全定價金拾二錢
郵税金四錢

一名日用電氣使用法

電氣の應用は逐日其の範圍を廣くし、猶將來も益々廣まるべきの傾向あり。故に商家農家に論なく、電氣の作用を詳にせざれば實際上不便少なからざるなり。本書は、米國最近の出版「日用電氣術」を抄譯したるものにて、電氣の原理より説き起して電信機、電話器、電氣燈、蓄音器、電氣車等は勿論、其他或は電氣と人身に應用して治療刑罰等に供し、又は家事に應用して字を書き畫を寫し、花を開き實を結はしめ、食物を調理し、盜賊を防き、來客を知り、奴婢に命令するなど種々樣々の事に用ゐるの法を委しく説き明かしたれば、學生諸君は言を待たず、苟くも一家の主人たり、被傭人たるもの一讀せずんばあるべからざるの書なり。